

EXCAVATION REPORT
ON
THE ARCHAEOLOGICAL
SITE
OF HOSSYOUJI

2017

KOKUSAI BUNKAZAI CO., LTD

法性寺跡
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

国際文化財株式会社

法性寺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

国際文化財株式会社

圖 版



1 調査前全景 (南から)



2 調査区全景 (南から)



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（北西から）



1 調査区北側柱穴群（北から）



2 調査区南側柱穴群（北から）



1 柱穴4上層礎石検出状況(南から)



2 柱穴4中層礎石検出状況(南から)



3 柱穴4下層礎石検出状況(南から)



4 柱穴13(北)柱穴260(南)瓦検出状況(西から)



5 柱穴140上層礎石検出状況(北から)



6 柱穴140下層礎石検出状況(北から)



7 柱穴111瓦検出状況(南から)



8 柱穴190石白検出状況(南から)



土坑 52 図 28-11



土坑 179 図 29-14



土坑 179 図 29-15



土坑 179 図 29-16



土坑 179 図 29-17



土坑 179 図 29-18



土坑 179 図 29-19



土坑 179 図 29-21



土坑 179 図 29-22



土坑 179 図 29-23



土坑 179 図 29-24



柱穴 169 図 30-42



柱穴 169 図 30-43



柱穴 169 図 30-44



土坑 56 図 31-46



柱穴 250 図 31-51



土坑 315 図 30-40



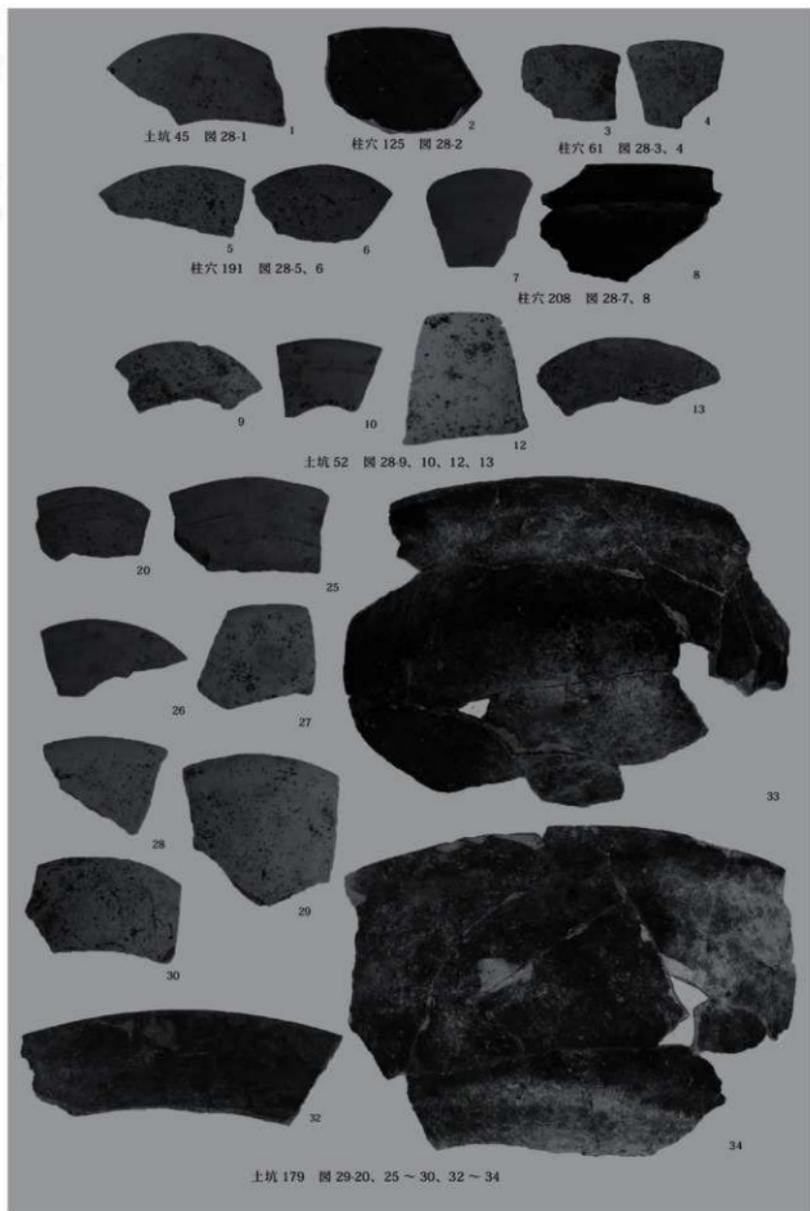
土坑 56 図 31-49

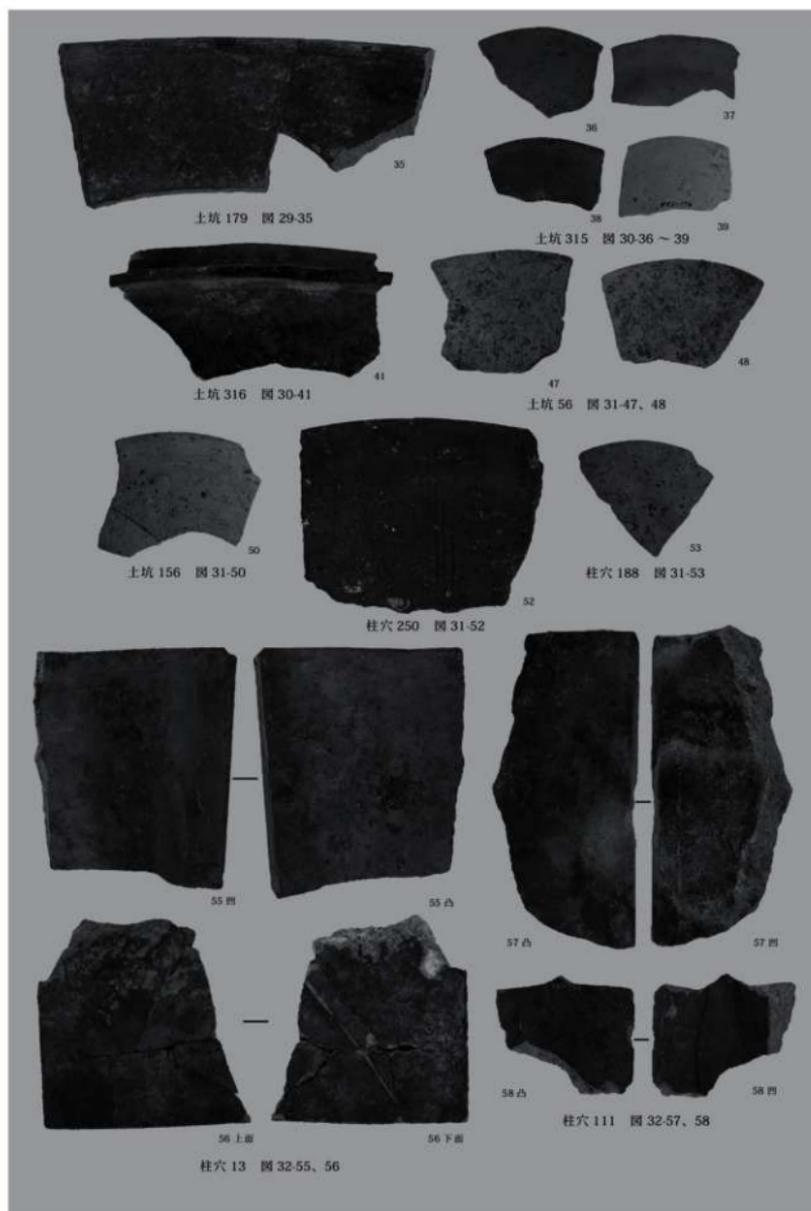


柱穴 188 図 31-54



柱穴 190 図 34-62





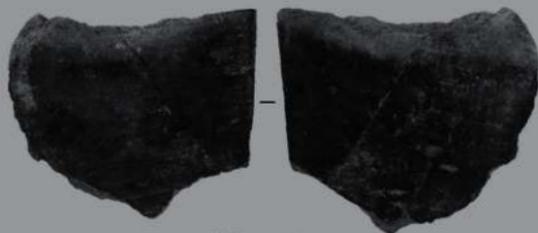
I 期の遺構出土土器 (5)、瓦類 (1) II 期の遺構出土遺物



59 凹

59 凸

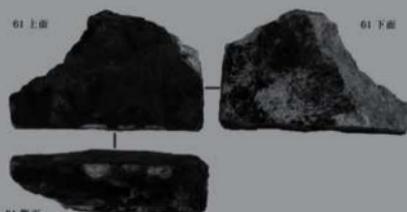
柱穴 111 図 32-59



61 上面

61 下面

柱穴 191 図 33-60



61 側面

柱穴 258 図 33-61



柱穴 83 図 34-63

報告書抄録

ふりがな	ほっしょうじあともいぞうふんかざいほつくつちょうさほうこくしょ
書名	法性寺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	河野凡洋
編集機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行年月日	西暦2017(平成29)年10月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほっしょうじあともい 法性寺跡	きょうと 京都市 ひがしやまこく(東山区) 東山区本町 にしやまこく(西山区) 二十丁目 441-1 ほか	26502	548	34° 58' 22"	135° 46' 15"	2017年 6月15日～ 2017年 7月20日	198.5	社会福祉法人 京都育和会 特別養護老人 ホーム新築工 事に伴う。

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
法性寺跡	寺院跡	鎌倉時代後半～ 室町時代	建物跡、柱穴 土坑	土師器、須恵器、 陶器、磁器、瓦器、 瓦質土器、瓦、石 製品、鉄製品等	
要約	主に鎌倉時代から室町時代前半の礎石建物を検出した。他に柱穴、土坑を検出した。北接する十条通にて2010年の発掘調査によって検出された伏見人形の窯跡など、近世の伏見人形生産に関わる遺構は検出できなかった。				

法性寺跡
埋藏文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2017 (平成 29) 年 10 月 31 日

編集・発行 / 国際文化財株式会社

〒 660-0805 尼崎市西長洲町 1 丁目 1 番 15 号

TEL : 06-4868-5980 FAX : 06-4868-5981

印刷 / 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

TEL : 075-256-0961

法性寺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

国際文化財株式会社

例 言

1. 本書は、京都市東山区本町二十丁目 441-1 ほかにおける埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、社会福祉法人京都育和会の計画する特別養護老人ホーム新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により 9 教文第 5 号の 24（受付番号 17S024）の通知にて実施したものである。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに国際文化財株式会社が実施した。
4. 発掘調査の面積は、198.5㎡である。
5. 発掘調査は、平成 29 年 6 月 15 日～平成 29 年 7 月 20 日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

国際文化財株式会社

西日本支店長 森下 賢司

主任調査員 河野 凡洋

調査補助員 伊藤 千尋、小林 郁也、嶋本 広行

7. 発掘調査及び整理作業は河野が担当した。
8. 遺構、遺物の写真撮影及び本書の執筆、編集は河野が行った。
9. 遺構図に使用した座標、水準測量は、テクノ・システム株式会社が行った。
10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

家崎 孝治、馬瀬 智光、島津 功、山田 邦和、吉川 義彦（五十音順）

京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、社会福祉法人京都育和会、

小田裕美建築設計事務所株式会社、株式会社アート、テクノ・システム株式会社

凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系Ⅵ系に基づいており、方位は座標北を北として表記した。
水準点はT.P.値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を40・100・250分の1とした。
4. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を3分の1とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、各章末に註として掲載した。
7. 遺構の分類は、下記の呼称を踏襲した。
掘立柱建物跡、礎石建物跡、柵列、溝、土坑、柱穴、礎石、園池、堀。
8. 遺物は全てに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の精細な事項については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所1996、小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀 -」京都編集工房2005、角田文衛他「第四部平安京の遺物」『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所1994にしたがった。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と歴史的環境	5
第3章 遺構	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構	9
1. I期(鎌倉時代から室町時代前半)の遺構	9
2. II期(室町時代後半から江戸時代)の遺構	28
第4章 遺物	33
第1節 遺物の概要	33
第2節 出土遺物	33
1. I期の遺構出土土器	33
2. II期の遺構出土土器	37
3. I期の遺構出土瓦類、石製品、銭貨	38
第5章 総括	42

挿図目次

図1 調査地位置図1(1:500,000)	1
図2 調査地位置図2(1:10,000)	2
図3 調査地位置図3(1:2,500)	3
図4 計画範囲と調査区配置図(1:400)	4
図5 調査区作業風景(東から)	4
図6 調査区作業風景(南から)	4
図7 周辺調査地位置図(1:5,000)	7
図8 平安京条坊復元図と法性寺推定寺域の位置関係(1:40,000)	8
図9 東壁壁土層断面図(1:50)	10
図10 I期の遺構全体平面図(1:100)	11
図11 建物跡1平・断面図(1:40)	13
図12 建物跡2平・断面図(1:40)	14
図13 建物跡3平・断面図(1:40)	15
図14 建物跡4平・断面図(1:40)	16
図15 建物跡5平・断面図(1:40)	17
図16 建物跡6平・断面図(1:40)	18
図17 建物跡7平・断面図(1:40)	20
図18 建物跡8平・断面図(1:40)	21
図19 建物跡9平・断面図(1:40)	22
図20 建物跡10平・断面図(1:40)	23
図21 柵列1平・断面図(1:40)	24
図22 柵列2平・断面図(1:40)	25

図 23	柵列 3 平・断面図 (1:40)	26
図 24	I 期の遺構平・断面図 (1) (1:40)	29
図 25	I 期の遺構平・断面図 (2) (1:40)	30
図 26	II 期の遺構全体面図 (1:100)	31
図 27	II 期の遺構平・断面図 (1:40)	32
図 28	I 期の遺構出土土器 (1) (1:3)	34
図 29	I 期の遺構出土土器 (2) (1:3)	35
図 30	I 期の遺構出土土器 (3) (1:3)	36
図 31	II 期の遺構出土土器 (1:3)	37
図 32	I 期の遺構出土瓦類 (1) (1:3)	39
図 33	I 期の遺構出土瓦類 (2) (1:3)	40
図 34	I 期の遺構出土石製品 (1:3)、銭貨 (1:1)	41
図 35	2010 年発掘調査地と今回調査地の位置関係 (1:250)	44
図 36	調査地遺構変遷図 (1:250)	45

表目次

表 1	出土遺物概要表	33
表 2	遺物観察表	46
表 3	遺物観察表	47

図版目次

図版 1	遺構	1 調査前全景 (南から)	
		2 調査区全景 (南から)	
図版 2	遺構	1 調査区全景 (北から)	
		2 調査区全景 (北西から)	
図版 3	遺構	1 調査区北側柱穴群 (北から)	
		2 調査区南側柱穴群 (北西から)	
図版 4	遺構	1 柱穴 4 上層礎石検出状況 (南から)	2 柱穴 4 中層礎石検出状況 (南から)
		3 柱穴 4 下層礎石検出状況 (南から)	4 柱穴 13 (北) 柱穴 260 (南) 瓦検出状況 (西から)
		5 柱穴 140 上層礎石検出状況 (北から)	6 柱穴 140 下層礎石検出状況 (北から)
		7 柱穴 111 瓦検出状況 (南から)	8 柱穴 190 石白検出状況 (南から)
図版 5	遺物	I 期の遺構出土土器 (1)	
図版 6	遺物	I 期の遺構出土土器 (2)	
図版 7	遺物	I 期の遺構出土土器 (3)、石製品	
図版 8	遺物	I 期の遺構出土土器 (4)	
図版 9	遺物	I 期の遺構出土遺物 (5)、瓦類 (1) II 期の遺構出土遺物	
図版 10	遺物	I 期の遺構出土瓦類 (2)、銭貨	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査に至る経緯は、京都市東山区本町二十丁目441-1ほか(図2・3)にて社会福祉法人京都育和会が計画した福祉センター新築工事が予定されたことが発端となる。建物は、第二久野病院本棟北側更地、約900㎡内に計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「法性寺跡」に該当する。

2017年4月26日社会福祉法人京都育和会によって地域密着型特別養護老人ホーム レット・イット・ビーの新築が計画されたことから、京都市文化財保護課は当該地の試掘調査を2017年5月9・10日に実施した。試掘の結果、埋蔵文化財の検出が確認されたことから、建築施設を設計する小田裕美建築設計事務所

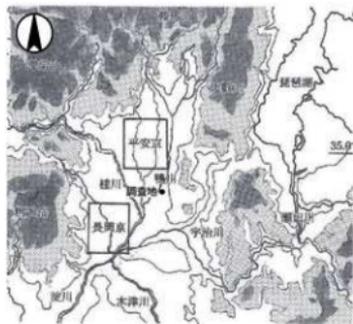


図1 調査地位置図1 (1:500,000)

所株式会社と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「京都市文化財保護課」という)との間で調査の協議もたれた。発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、社会福祉法人京都育和会より委託を受けた国際文化財株式会社が行った。現地調査期間は平成29年6月15日～平成29年7月20日まで実施した。発掘調査の結果、調査地では鎌倉時代から室町時代を中心に、建物跡や柱穴、土坑などが確認できた。

第2節 調査の経過

今回の調査の体制と方法を定めるために、周辺の調査によって得られた遺構・遺物の成果や今日までの研究について精査し、検証を行った。周辺では京都市埋蔵文化財研究所によって、1980年に市立月輪小学校の校舎改築工事に先立って試掘調査^(註1)、1988年に海蔵院(洛東院)境内での特別養護老人ホーム新築工事に伴う発掘調査^(註2)、1997年に新十条通建設に伴う発掘調査が行われている^(註3)。また、1999年にJR奈良線複線化工事に伴う試掘・立会調査^(註4)、2010年に任天堂京都リサーチセンター電波暗室建設に伴う発掘調査、十条通道路拡幅事業に伴う発掘調査が行われている^(註5、6)(図7)。これら発掘調査、試掘・立会調査では、法性寺跡の遺構と明確に判断できる遺構は確認されていないが、関連性が考えられる遺構が確認されており、平安時代の瓦も出土している。また、弥生時代の遺構や遺物も多数確認されており、周辺地域での弥生時代の様相が判明しつつある。

近接する1997年の発掘調査においては弥生時代の遺構や遺物、2010年の発掘調査では弥生時代の遺物の他、江戸時代の伏見人形の窯跡も検出されている。

これら周辺の発掘調査成果から、当調査地も法性寺境内推定範囲に位置するため、これらに類する成果が得られるものと考えられた。特に2010年の十条通の発掘調査は当調査地に北接するため、伏見人形の窯跡もしくは関連する遺構の存在も考えられた。

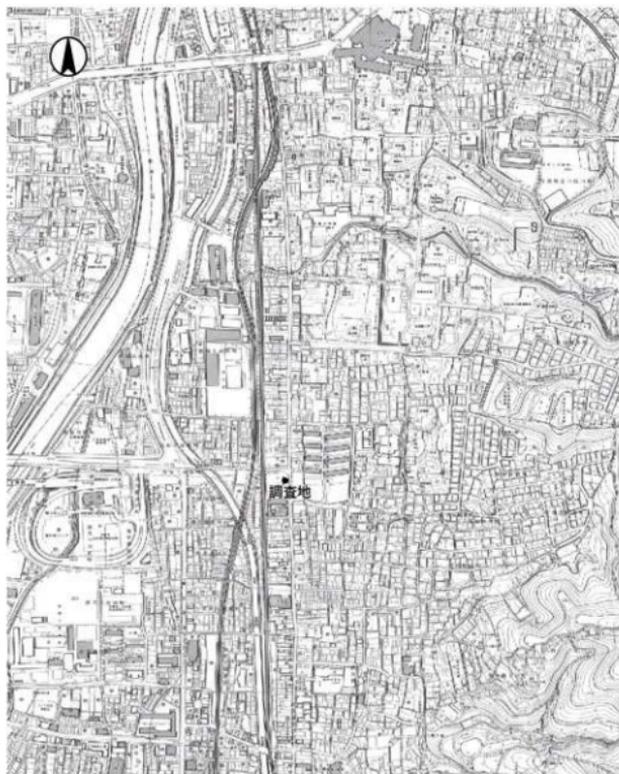


図2 調査地位置図2 (1:10,000)

調査体制としては、主任調査員1名、調査補助員3名の配置を行った。また、京都市文化財保護課の指導により、学術研究に基づいた調査を行うため、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部博士（文化史学）山田邦和教授に委員を依頼した。

試掘調査によって建物計画範囲の大半は近・現代の視乱によって遺構が削平されていることが確認されたため、道路に近い東側部分が調査対象地となった（図4）。

基準点は ToK-01 X=113917.547 Y=20929.775 H=32.90、ToK-02 X=113935.796 Y=20931.347 H=33.21、ToK-03 X=113945.811 Y=20939.279 H=33.25 を設置した。

平成29年6月14日に調査対象部分の既存のアスファルトの切断、撤去及びフェンス撤去を行い、仮設ハウス、トイレ、バックホー、調査道具類の搬入等を行った。

平成29年6月15日に調査区北側から重機掘削を開始した。上層には近・現代盛土があり、その層を掘削した。その後、試掘調査で確認された黒褐色土を、遺構面と考えられる細砂土まで掘削した。

平成29年6月19日までに重機掘削を終了し、遺構検出作業を行った。写真撮影の後、遺構掘削作業を開始した。遺構掘削の際は、試掘調査によって1面に2時期以上の遺構が重なることが判明して

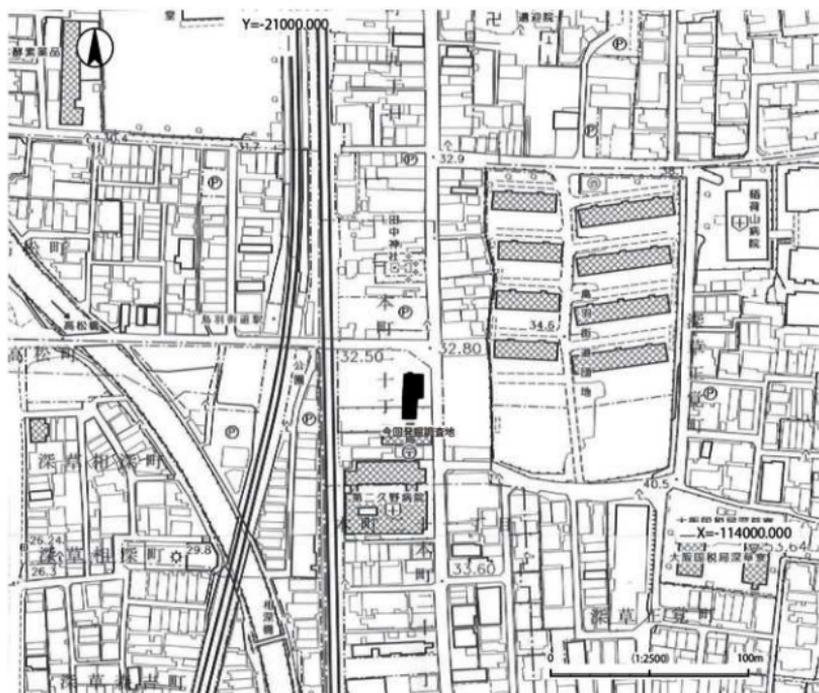


図3 調査地位置図3 (1:2,500) (京都市都市計画基本図1:2,500「京都市」『動産機』に加筆)

いたため、遺物で判別できない場合は埋土に拠ることとした。遺構埋土には黒褐色系、灰褐色系、暗褐色系があり、上層の暗褐色土もしくは黒褐色土と類似した埋土をもつ遺構を第1段階の遺構として掘削を開始した。

平成29年6月26日までに遺構掘削を終了し写真撮影を行った。写真撮影の後、前回の遺構検出作業で部分的に不明瞭な遺構があったため、再度遺構検出のための精査作業を行った。

平成29年6月27日より遺構掘削作業を開始した。灰褐色系、暗褐色系の遺構は複数で切り合い関係があったため、切り合い関係を把握するために一段下げを行い、また土層断面にても確認した。一段下げの際には柱痕跡の有無を確認する作業も同時に行った。柱穴には礎石が残るものが多数あった。

平成29年7月10日に遺構掘削を終了し、7月11日に全景写真を撮影した。撮影時には礎石を残し、撮影の後、礎石を外し完掘作業と掘残しの有無を確認する作業を開始した。7月14日にそれら作業は終了した。

平成29年7月18日から埋め戻し作業と撤収作業を開始し、7月20日に終了し、現地での作業は完了した。

尚、遺構の平面実測、断面実測などの記録作業は遣り方及びトータルステーションにて随時行った。

<参考文献>

- (註1) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概報」2011年
 (註2) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概報」1993年
 (註3) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概報」1996年
 (註4) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概報」2002年
 (註5) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-11 法性寺跡」2010年
 (註6) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-19 法性寺跡」2010年

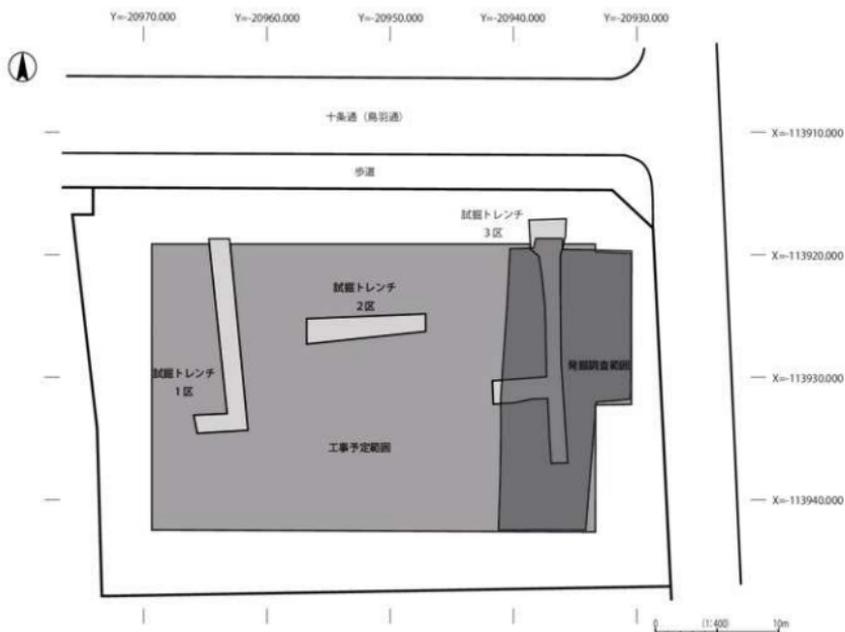


図4 計画範囲と調査区配置図 (1:400)



図5 調査区作業風景 (東から)



図6 調査区作業風景 (南から)

第2章 位置と歴史的環境

当調査地は法性寺跡推定寺域の南辺に位置し、現在の行政区分では京都市東山区本町二十丁目 441-1 ほか、に属する。西日本旅客鉄道の奈良線及び京阪電気鉄道株式会社の京阪本線西側に位置し、北西には京阪本線烏羽街道駅、東側には本町通（伏見街道）がある。

現在推定されている法性寺跡の寺域は、北は琵琶湖疏水に架かる一之橋から東大路まで、東は京都第一赤十字病院の東側から慧日山東福寺の北側を通り今熊野南谷町、南は伏見稲荷大社境内の北端から深草南明町へ出て、本町二十丁目に至り琵琶湖疏水に当たる、西はそこから一之橋までの範囲である（註7）（図8）。

法性寺は平安時代の延長年間（923-931年）に当時左大臣であった藤原忠平によって創建され、承平四年（934年）に定額寺となる。法性寺本堂の他、代表的なものでは寛弘三年（1006年）藤原道長によって建立された五大堂、久安四年（1148年）に藤原忠道の室、宗子によって建立された最勝金剛院がある。創建以後、摂関家の氏寺として藤原忠平の子孫たちからの崇敬はもちろん、外戚関係である皇族からの崇敬をも集め、平安時代末期から鎌倉時代にかけて隆盛し、広大な寺域の中にいくつかの子院も存在していたようである。

鎌倉時代に入り寛元元年（1243年）に九条道家によって法性寺の寺域内に子院としてではなく、独立した寺院として東福寺が創建された。以後、法性寺は本来の寺域を狭められながらも東福寺と併存する形になる。そして、建長六年（1254年）に火災により南大門、鐘樓、金堂、塔が一時焼亡し、阿弥陀堂、法華堂、五大堂が被害を受けている。また、法性寺、東福寺は共に鎌倉時代末期の朝廷方と鎌倉方の争乱に巻き込まれたようである。その後、東福寺の方は足利將軍家など各時代の権力からの保護を受けるようになる。

また、現在の東山区本町一丁目から二十二丁目間を南北に縦断する本町通は、近世から伏見街道の一部となり交通の要所として機能していた。その中で、本町11丁目から22丁目間は中世では法性寺大路と呼ばれ、法性寺寺域内を南北に縦断し京から大和や伊賀へ向かう交通の要所として機能していたと考えられている。法性寺大路を含む南北の区域は室町時代の文書の中で法性寺大路八町、法性寺八町とも呼ばれ東福寺門前の商業地域となっていたようで、東福寺による検断や酒麴諸商売役銭人夫以下臨時課役の免除などが幕府によって認められていた。

こうして一時は広大な寺域を領し、創建期から摂関家の氏寺として崇敬を集めてきた法性寺は東福寺創建以降は衰退していく。しかし、江戸時代を通じて存続し、現在でも本町通沿いにその名跡を引き継ぐ寺院が存続している。

周辺では1980年（註8）、1988年（註9）、1997年（註10）、1999年（註11）、2010（註12）年に財団法人京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が行われている（図7）。

1980年の調査では法性寺あるいは東福寺に関連すると考えられる平安時代後期から室町時代の遺構が検出されている。また、弥生時代後期から古墳時代初期の溝が検出されている。

1988年の調査では平安時代前期の溝、平安時代中期の建物、室町時代の建物、柱穴、土坑が検出されている。溝や建物は東に振れており、これは茶理の規制を受けている可能性があると考えられている。

1997年の調査では鎌倉時代の東西溝や土坑、弥生時代や古墳時代の遺物を含む流路などが検出されている。流路理土上層では平安時代前期の遺物を含む層があり、平安京造営による開発の際の整地層で

あろうと考えられている。

1999年の調査はJR奈良線複線化工事に伴った試掘・立会調査ではあったが、三ノ橋川付近と、鳥羽街道駅付近で弥生時代から飛鳥時代にかけての遺構が検出されている。また、全域から平安時代の瓦が出土しており、法性寺境内地に含まれていたことが推定されている。

2010年の調査は東山区福稲上高松町、同区本町二十丁目の2カ所で実施されている。福稲での調査では弥生時代から古墳時代、平安時代中期から鎌倉時代前期、江戸時代の遺構が検出されている。中でも弥生時代の方形周溝墓8基が検出されたことで墓域の存在が確認され、また、周溝や壺の中から炭化米が出土しており、近隣に水田の存在や集落のあった可能性が考えられている。他にも古墳時代の竪穴式住居、平安時代中期の木棺墓、鎌倉時代の溝などが検出されている。平安中期の木棺墓についても炭で覆ったと考えられており、副葬品も多く手厚く葬られたと考えられている。また被葬者についてもそれなりの身分のあった人物であろうと考えられている。そして、時期的には法性寺造営時期であるため、注目すべき遺構とされている。

本町二十丁目での調査では古墳時代、室町時代、江戸時代から明治時代の遺構が検出されている。古墳時代の遺構としては溝、室町時代の遺構は建物、柱穴、土坑、溝など、江戸時代から江戸時代の遺構としては伏見人形の窯跡、土坑、溝などが検出している。室町時代の建物は北に向かて東に振れているため条里の振れの影響に拠ったと考えられている。伏見人形の窯跡と共に土型が大量に出土しており、伏見人形を制作していた窯元の存在が確認されている。

<参考文献>

(註7) 以下の文献を参考に本文を記した。

西田直二郎『藤原忠平の法性寺及び道長の五大堂』京都府『京都府史跡名勝天然記念物調査報告 第9冊』1928年

福山敏夫『法性寺の位置について』佛敎藝術学会編『佛敎藝術 100』毎日新聞社 1975年

京都市『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』平凡社 1987年

(註8) (註1)に同じ

(註9) (註2)に同じ

(註10) (註3)に同じ

(註11) (註4)に同じ

(註12) (註5)に同じ

(註13) (註6)に同じ

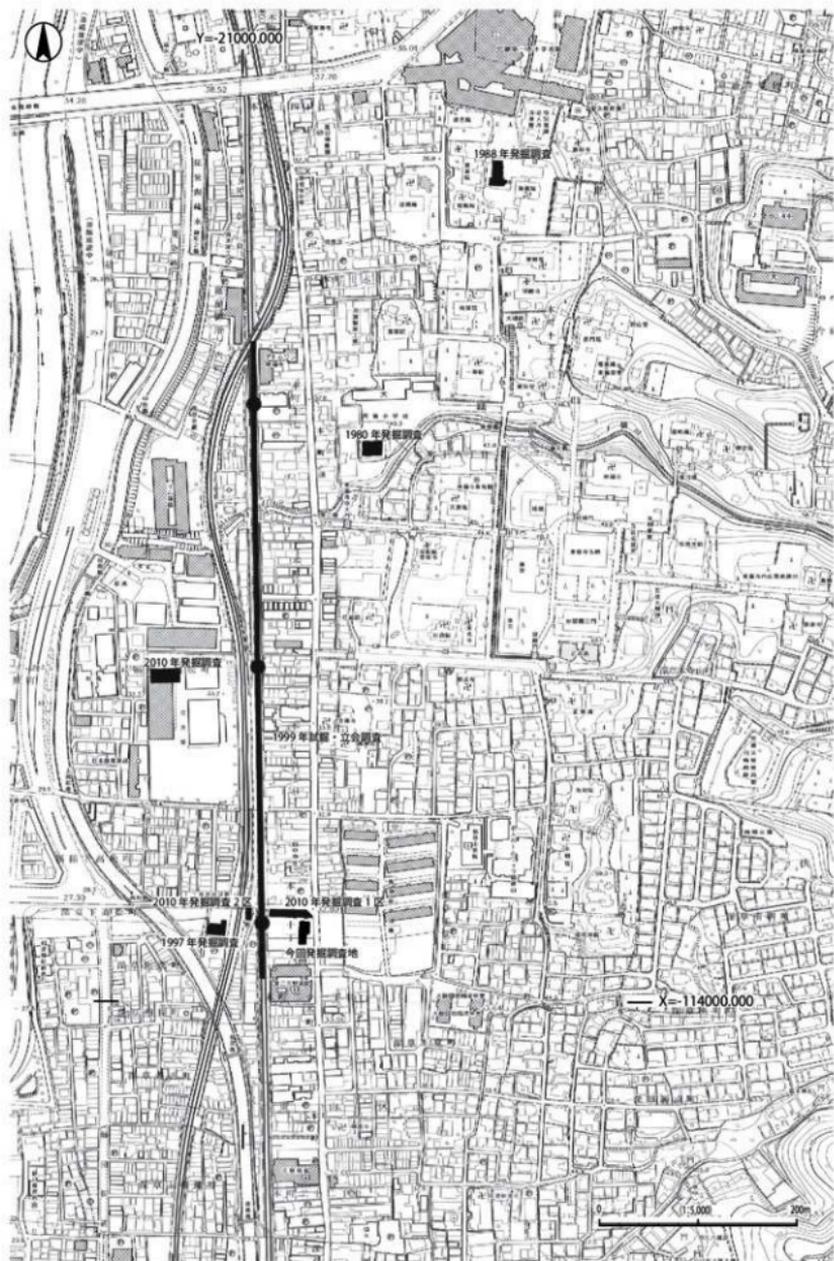


図7 周辺調査地位圏図 (1:5,000) (京都市計画基本図 1:2,500 「京都駅」 「軌道線」 追加筆)

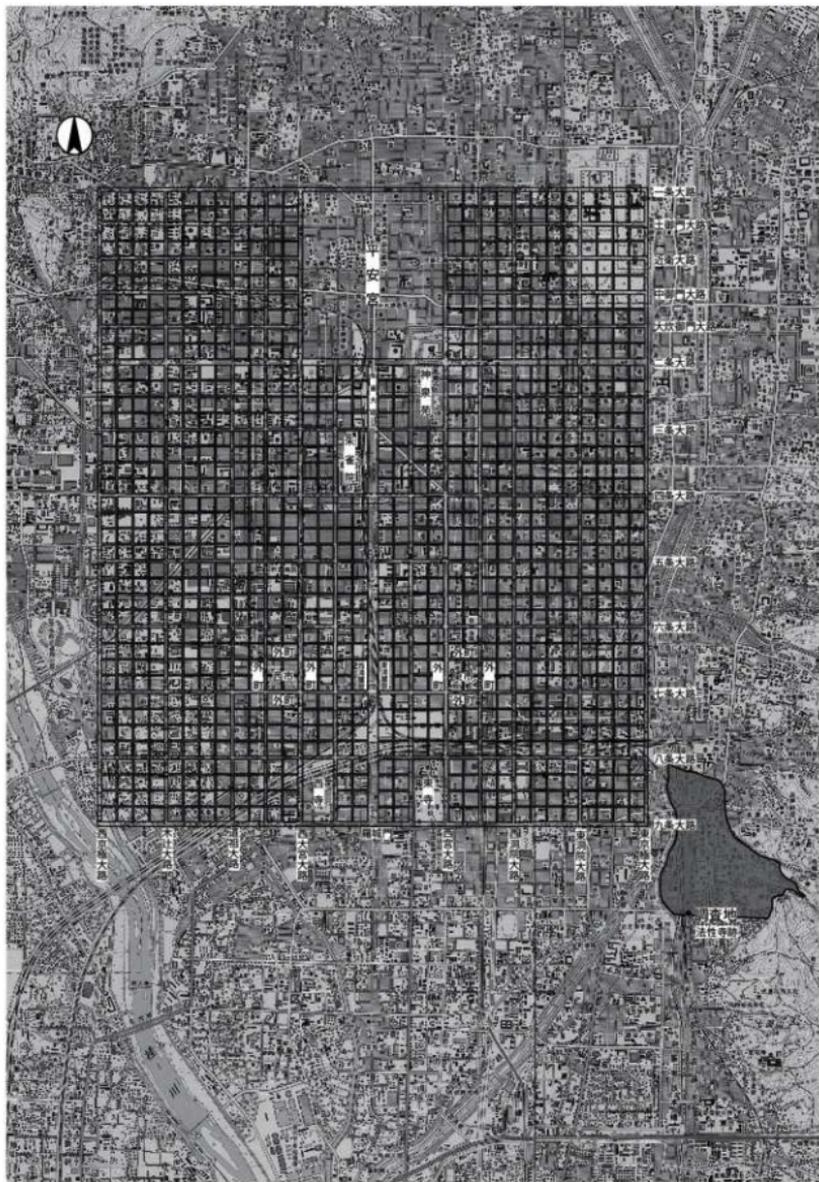


図8 平安京条坊復元図と法性寺推定寺域の位置関係 (1:40,000)

※法性寺跡推定寺域は京都市文化市民局 遺跡地図閲覧システムを参照

第3章 遺構

第1節 基本層序

調査区内における基本層序（図9）は現地表面から順に近現代盛土（東壁1層）、その下層で中世から近世までの遺物を含む包含層である暗褐色から黒褐色の粘質土層（東壁2・3層）、さらに下層では、中世の遺物を含む包含層であるやや明るめの黒褐色土層（東壁4・8・11・12・40・41）であった。地山は調査区内の北側から南側に向かうにつれ粗砂土から粘質土に変わっていた。また、調査地は西に向かって傾斜していた。

中世の遺物を含む包含層は調査区東壁と北壁東側でしか見ることができず、大半は近世の遺物まで含む包含層が地山直上まで堆積していた。調査区西壁付近と南側は近現代の盛土の堆積が地山直上まで堆積していたため、後世に攪乱もしくは削平を受けたものと考えられる。

第2節 遺構

今回、北壁2・3層では遺構が確認されなかったため地山での遺構検出となった。試掘調査の成果により、時期としては主に鎌倉時代から室町時代の遺構が確認できると考えられた。

検出時には埋土が暗褐色粘質土の遺構、黒褐色粘質土の遺構、東壁の土層では確認できなかった埋土が灰褐色粘質土の遺構を確認した。遺構は一部に密集していることはなかったが、切り合い関係があるものが多かった。そのため、少なくとも2時期以上あると考えられた。検出時に遺物を出土した遺構は僅かであり時期の判断が難しかったため、切り合い関係から明確に新しいと判断できた遺構、また北壁2・3層に類似した埋土の遺構から掘削し、第1段階目とした。その後、残りを第2段階目として掘削したが、新しい遺構も混ざっていた。

そのため、調査の段階によって記すのではなく、現場作業中に時期が判別できた遺構と整理作業によって時期が判別できた遺構を整理すると、検出した遺構数が大多数を占める鎌倉時代後半から室町時代前半（Ⅰ期）、少数になる室町時代後半から江戸時代の遺構（Ⅱ期）に分けることができたため、以下はそれによって記す。

1. Ⅰ期（鎌倉時代から室町時代前半）の遺構

Ⅰ期の遺構には建物跡、櫓列、柱穴、土坑があり、主に土器編年で鎌倉時代後半から室町時代前半の京Ⅴ〔京都Ⅴ〕期から京Ⅸ〔京都Ⅸ〕期と考えられる遺物が出土している。また平安時代末期から室町時代前半（京Ⅶ〔京都Ⅶ〕期）に属する遺物を出土した遺構が僅かにある。遺物を出土していない遺構については、遺物を出土した遺構との埋土の類似性からこの時期に入るものと判断した。

検出した遺構では柱穴が最も多く、溝や自然流路、井戸などは検出していない。

柱穴については礎石が残っているものが多く、瓦や磚、石臼を礎石の代わりに使用しているものが僅かであった。そして、礎石は置かれていないが柱痕跡が残る柱穴も少数検出した。

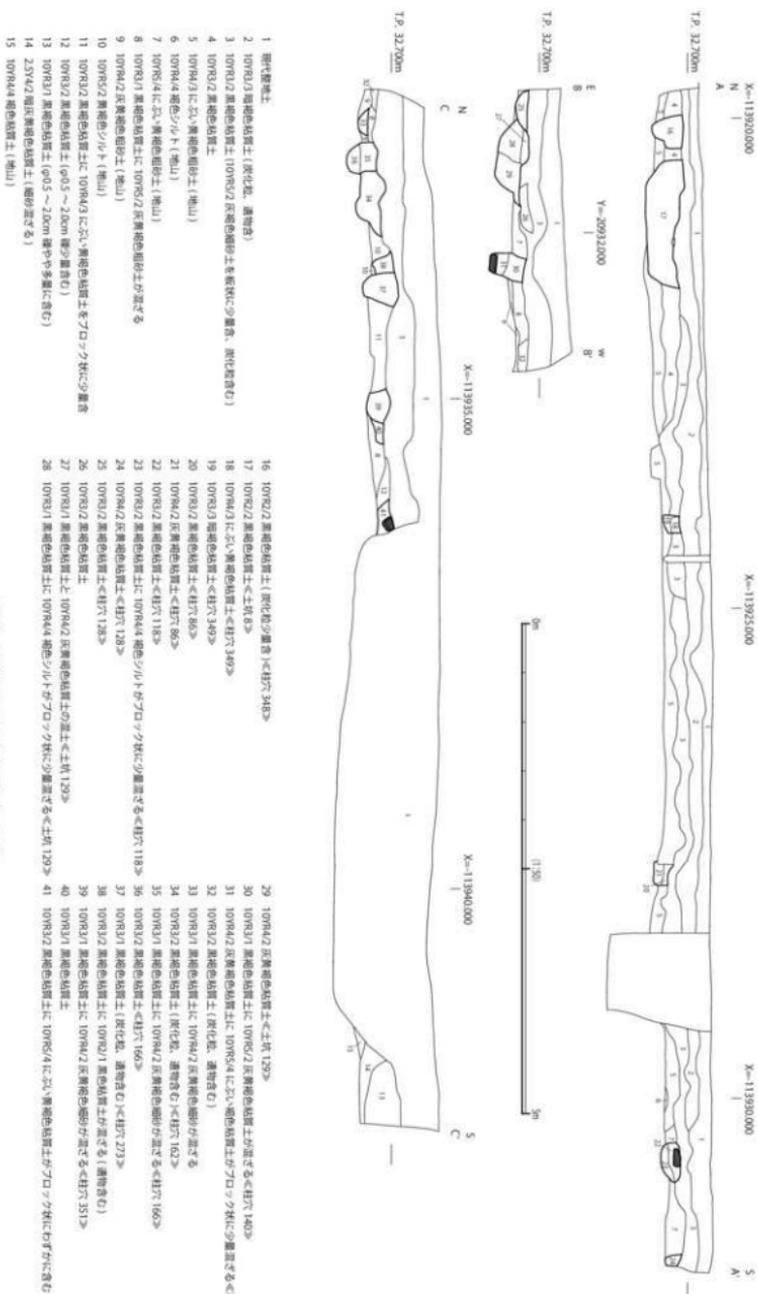


図9 東壁壁土層断面図 (1:50)

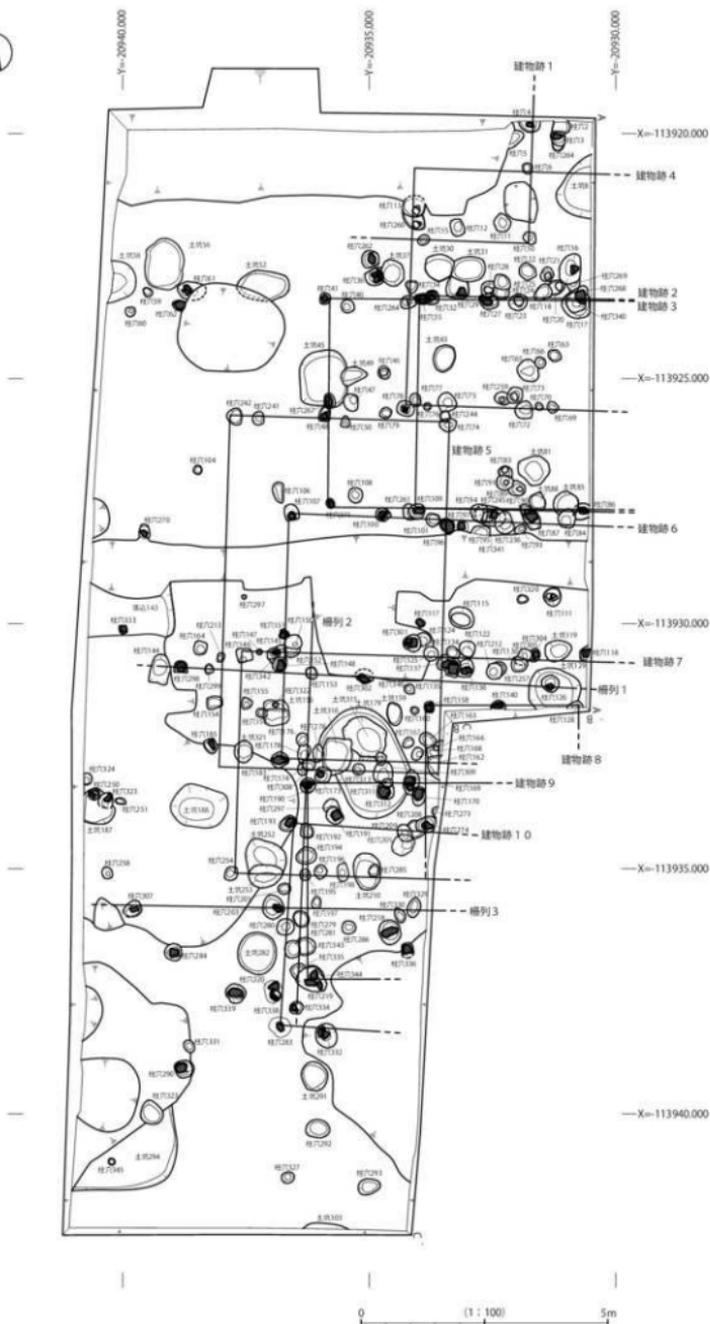


図10 I期の遺構全体平面図(1:100)

建物跡1(図10、11 図版3、4) 調査区東北で検出した建物跡である。柱穴4、柱穴10、柱穴15で構成され、東西2.1m以上、南北2.4m以上で東西2間以上、南北1間以上の礎石建物と考えられる。北側は調査区外のため、西側は後世の削平のためか検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径は0.26～0.45m、短径、0.2～0.24m、深さ0.05～0.32mである。柱穴4の礎石は3時期に亘って置かれており、長軸0.15～0.2、短軸0.8～1.8m、厚さ0.04～0.09である。1層では京Ⅸ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器、瓦器が出土している。2層、3層では遺物が出土していないため具体的な時期差は判別できない。

建物跡2(図10、12 図版3) 建物跡1の南側で検出した建物跡である。柱穴18、柱穴35、柱穴77、柱穴87、柱穴109で構成され、東西2.4m以上、南北4.3mで東西2間以上、南北2間の東西棟となる礎石建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で、長径0.28～0.4m、短径0.2～0.3m、深さ0.05～0.14mである。柱穴35、87、109には礎石が残っており、長軸0.18～0.24、短軸、0.14～0.22m、厚さ0.06～0.08mである。柱穴18からは京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器が出土している。

建物跡3(図10、13 図版3) 建物跡1の南側で検出した建物跡である。柱穴17、柱穴27、柱穴41、柱穴86、柱穴245、柱穴261、柱穴264、柱穴267、柱穴271で構成され、東西5.4m以上、南北4.1mの東西3間以上、南北2間の東西棟となる礎石建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径0.2～0.6m、短径0.18～0.54m、深さ0.06m～0.32mである。柱穴17、柱穴27、柱穴41、柱穴86、柱穴245、柱穴261、柱穴267、柱穴271には礎石が残っており、長軸0.14～0.26m、短軸0.08～0.2m、厚さ0.04～0.1mである。柱穴261は上層を柱穴109に切られており、土層断面では礎石の位置が上下でほぼ重なることが確認できた。柱穴17で京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器が出土している。

建物跡4(図10、14 図版3) 建物跡3の北側で検出した建物跡である。柱穴6、柱穴34、柱穴72、柱穴78から構成され、東西2.4m、南北4.8mで東西2間以上、南北2間の東西棟となる礎石建物と考えられる。北西隅は攪乱によって壊されており、東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径0.24～0.4m、短径0.2～0.36m、深さ0.05～0.17mである。柱穴78には礎石が残っており、長軸0.12、短軸0.1、厚さ0.02mである。柱穴78で京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器が出土している。

建物跡5(図10、15 図版3) 建物跡4の南側で検出した建物跡である。柱穴50、柱穴74、柱穴96、柱穴137、柱穴162、柱穴173、柱穴213、柱穴242で構成され、東西4.5m、南北7.1m、東西2間、南北3間の南北棟の礎石建物と考えられる。西側列は削平されたか、攪乱に壊されているためか北から2番目と南西隅の柱穴を検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径0.18～0.34m、短径0.14～0.3m、深さ0.05～0.2mである。柱穴96、柱穴137、柱穴173には礎石が残っており、長軸0.13～0.34m、短軸0.1～0.3m、厚さ0.05～0.09mである。柱穴137は上層を柱穴135に切られており、柱穴135の礎石は柱穴137の礎石に重なるように置かれていた。柱穴137で京Ⅸ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器が出土している。

建物跡6(図10、16 図版3) 建物跡3、4の南側で検出した建物跡である。柱穴84、柱穴94、柱穴100、柱穴107、柱穴151、柱穴183、柱穴309で構成され、東西5.6m以上、南北5.1m、東西3間以上、南北2間の東西棟の礎石建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で、長径0.2～0.4m、短径0.2～0.36、深さ0.08～0.2mである。柱穴100、柱穴107、柱穴

151、柱穴 183 には礎石が残っており、長軸 0.16 ～ 0.34m、短軸 0.06 ～ 0.17m、厚さ 0.04 ～ 0.05m である。柱穴 151 の礎石は 2 つ重なった状態で検出した。柱穴 309 で京Ⅷ〔京都Ⅶ〕から京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器が出土している。

建物跡 7 (図 10、17 図版 3) 建物跡 5 西側列の東側で検出した建物跡である。柱穴 125、柱穴 146、柱穴 196、柱穴 254、柱穴 305、柱穴 321 で構成され、東西 5.8m 以上、南北 4.5m、東西 3 間以上、南北 2 間の東西棟となる掘立柱建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径 0.26 ～ 0.36m、短径 0.2 ～ 0.34m、深さ 0.1 ～ 0.2m である。柱穴 125 から京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器、瓦器が出土している。

建物跡 8 (図 10、18 図版 3、4) 建物跡 7 の南側で検出した建物跡である。柱穴 128、柱穴 140、柱穴 158、柱穴 274 で構成され、東西 3m、南北 2.4m 以上、東西 2 間、南北 2 間以上の南北棟となる礎石建物と考えられる。東側と南側は調査区外のため検出できなかった。検出面で長径 0.22 ～ 0.42m、短径 0.14 ～ 0.32m、深さ 0.07 ～ 0.34m である。柱穴 140、柱穴 158、柱穴 274 には礎石が残ってお

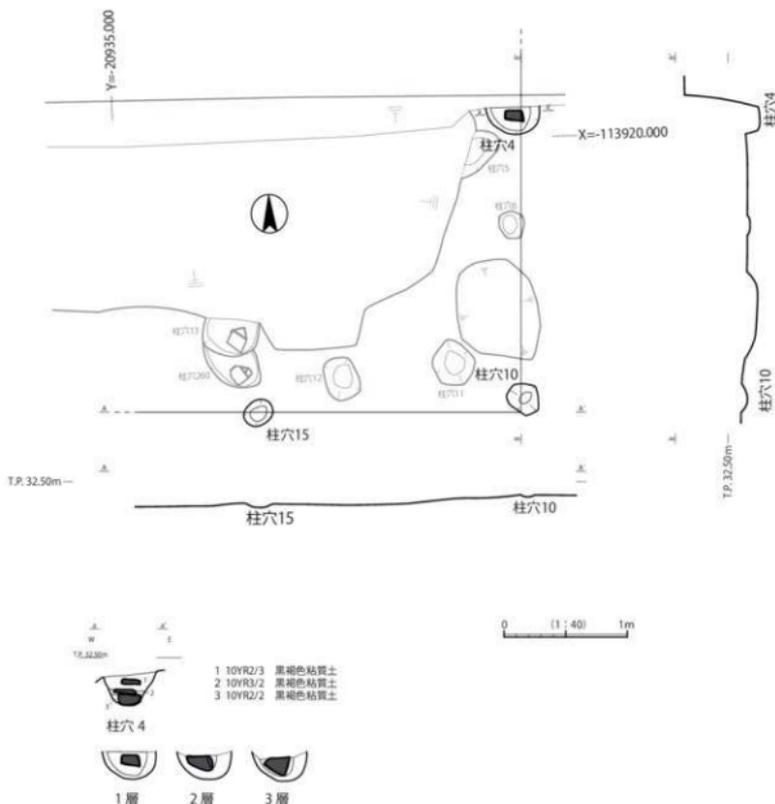


図 11 建物跡 1 平・断面図 (1 : 40)

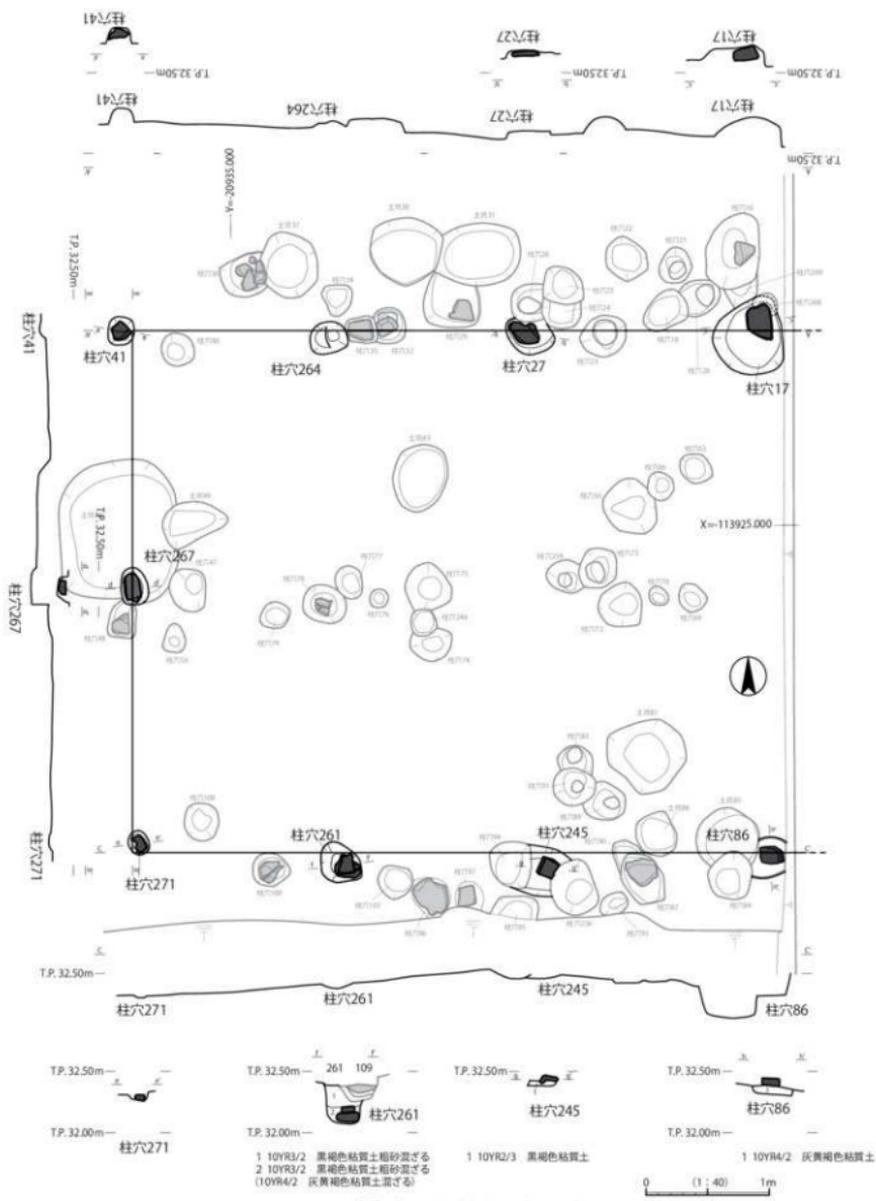
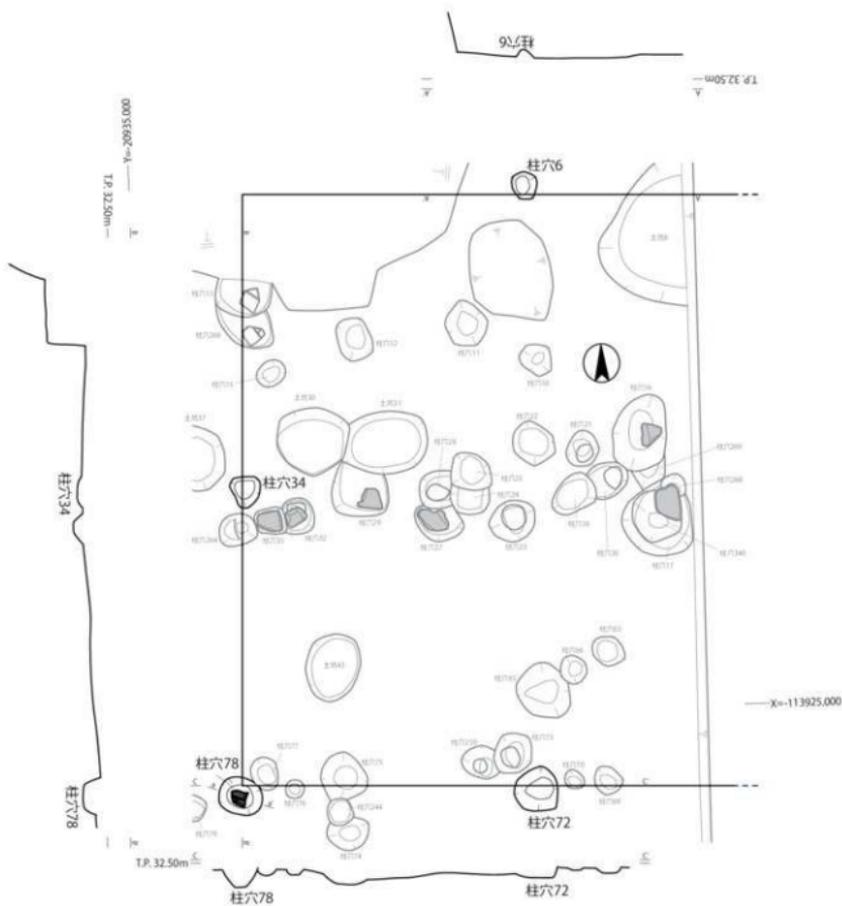


図 13 建物跡 3 平・断面図 (1:40)



- 1 10YR2/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR4/3 に少し黄褐色粘質土細砂含む
- 3 10YR3/4 暗褐色粘質土細砂含む

0 (1:40) 1m

図 14 建物跡 4 平・断面図 (1:40)

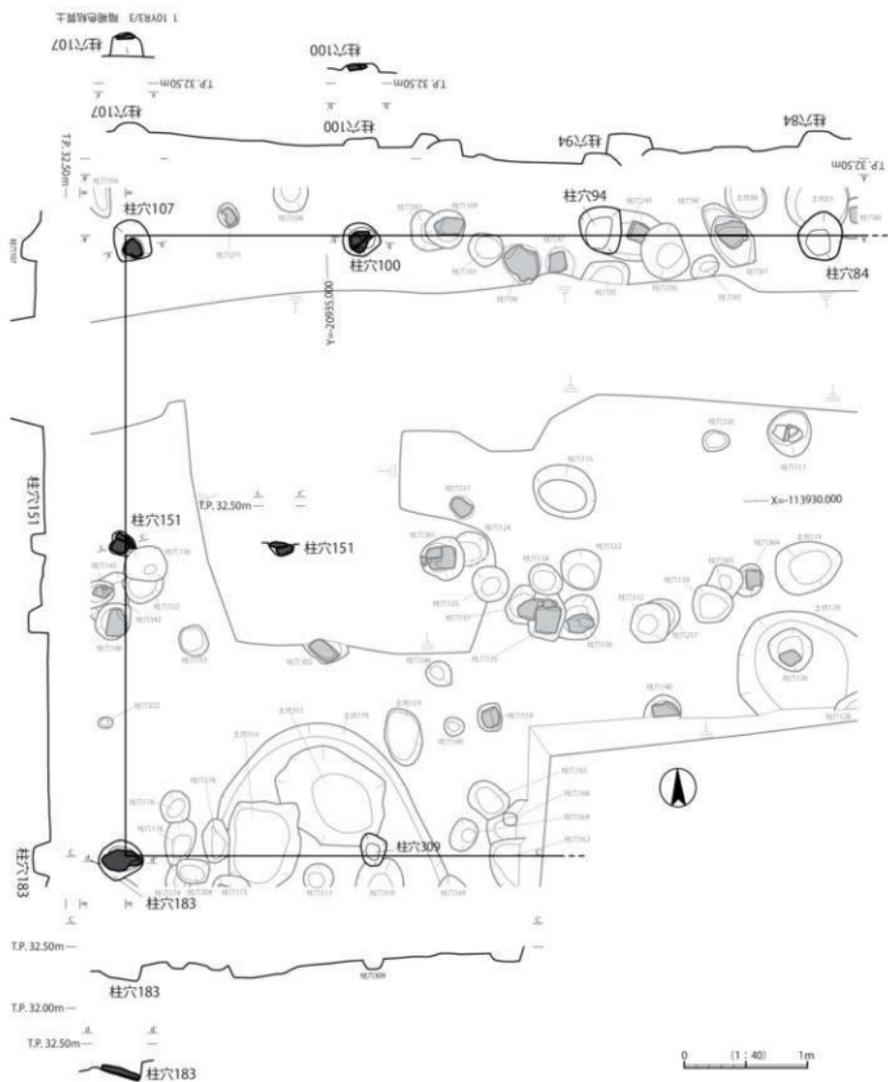


图 16 建物跡 6 平・断面図 (1:40)

り、長軸 0.15～0.25m、短軸、0.12～0.16m、厚さ 0.07～0.11m である。柱穴 140 は 2 時期に亘って礎石が置かれているが 2 層では遺物が出土していないため具体的な時期差は判別できない。柱穴 140 の 1 層では京 IX〔京都 VIII〕期の土師器、瓦質土器、柱穴 208 では京 IX〔京都 VIII〕期と考えられる土師器、土師質土器が出土している。

建物跡 9 (図 10、19 図版 1、4) 柱穴 169、柱穴 190、柱穴 195、柱穴 219 で構成される、東西 2.1 m 以上、南北 4.2m、東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟となる礎石建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径 0.22～0.6、短径 0.2～0.5m、深さ 0.11～0.35 m である。柱穴 169、柱穴 190、柱穴 219 には礎石が残っており、長軸 0.18～0.23m、短軸 0.11～0.18 m、厚さ 0.07～0.09m である。柱穴 190 では石臼が礎石に転用されている。柱穴 169 では京 IX〔京都 VIII〕期と考えられる土師器、青磁と考えられる出土している。

建物跡 10 (図 10、20 図版 1) 建物跡 5 の南側で検出した建物跡である。柱穴 193、柱穴 209、柱穴 280、柱穴 283 で構成され、東西 2.3m 以上、南北 4.2m、東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟となる礎石建物と考えられる。東側は調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で 0.32～0.40m、短径 0.3～0.38m、深さ 0.02～0.18m である。柱穴 193、柱穴 283 には礎石が残っており、長軸 0.19～0.22m、短軸 0.18～0.19m、厚さ 0.08～0.1m である。柱穴 209 では京 IX〔京都 VIII〕期と考えられる土師器が出土している。

櫛列 1 (図 10、21 図版 3) 建物跡 9 の北側で検出した櫛列である。柱穴 126、柱穴 298、柱穴 302 で構成され、東西 7.5m 以上で 2 間以上の礎石の櫛列と考えられる。検出面で長径 0.26～0.38m、短径 0.2～0.34m、深さ 0.2～0.35m である。東西とも調査区外のため検出できなかった。柱穴 126、柱穴 298、柱穴 302 には礎石が残っており、長軸 0.17～0.22m、短軸 0.13～0.18m、厚さ 0.04～0.07 m である。いずれからも遺物は出土していない。

櫛列 2 (図 10、22 図版 3) 調査区南側で検出した櫛列である。柱穴 153、柱穴 178、柱穴 194、柱穴 343 で構成され、南北 5.7m 以上で 3 間以上の櫛列と考えられる。柱穴の規模は検出面で 0.26～0.4m、短軸 0.22～0.34m、深さ 0.05～0.19m である。柱穴 178 では京 VIII〔京都 VII〕期と考えられる土師器が出土している。

櫛列 3 (図 10、23 図版 1) 建物跡 7 の南側で検出した櫛列である。柱穴 203、柱穴 307、柱穴 329 で構成され、東西 5.7m 以上で 2 間以上の礎石の櫛列と考えられる。東西とも調査区外のため検出できなかった。柱穴の規模は検出面で長径 0.38～0.48m、短径 0.24～0.4m、深さ 0.1～0.13m である。柱穴 203、柱穴 307 には礎石が残っており、長軸 0.17～0.22m、短軸 0.09～0.15m、厚さ 0.07～0.1 m である。柱穴 307 では京 IX〔京都 VIII〕期と考えられる土師器が出土している。

柱穴 13 (図 10、24 図版 4) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.44m、短径 0.3m、深さ 0.26m である。柱痕跡が残っており、径 0.22m である。柱痕跡の底部には平瓦と磚が礎石状に重ねられて置かれていた。埋土は黒褐色粘質土が主である。遺物は京 IX〔京都 VIII〕期と考えられる土師器が出土している。

礎石柱穴 16 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した礎石の残る柱穴である。検出面で長径 0.6m、短径 0.42、深さ 0.15m である。礎石は長軸 0.36m、短軸 0.32、厚さ 0.14m である。南側は柱穴 269 を切る。埋土は黒褐色粘質土を主とする。遺物は京 VIII〔京都 VII〕期と考えられる土師器、瓦質土器が出土している。

柱穴 21 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.26m、深さ 0.12m である。柱痕跡が残っており、直径 0.14m である。埋土は黒褐色粘質土を主とする。遺物

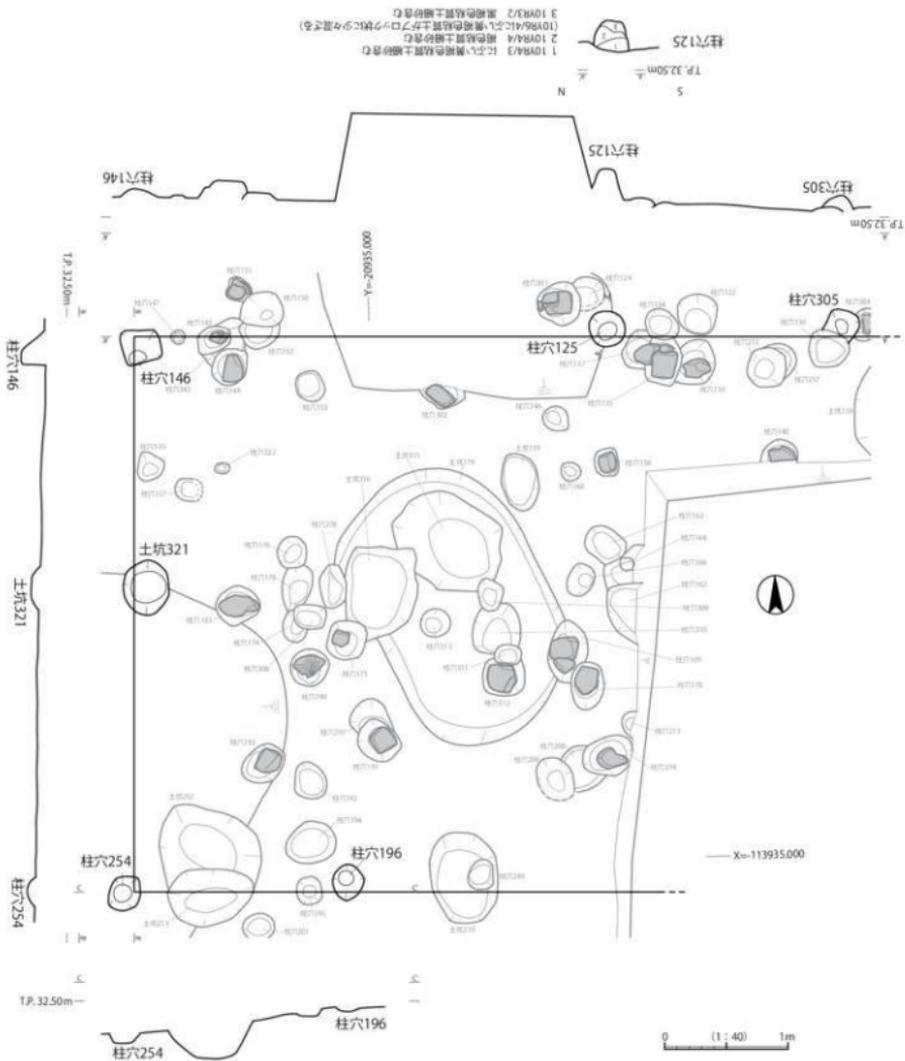


図 17 建物跡 7 平・断面図 (1:40)

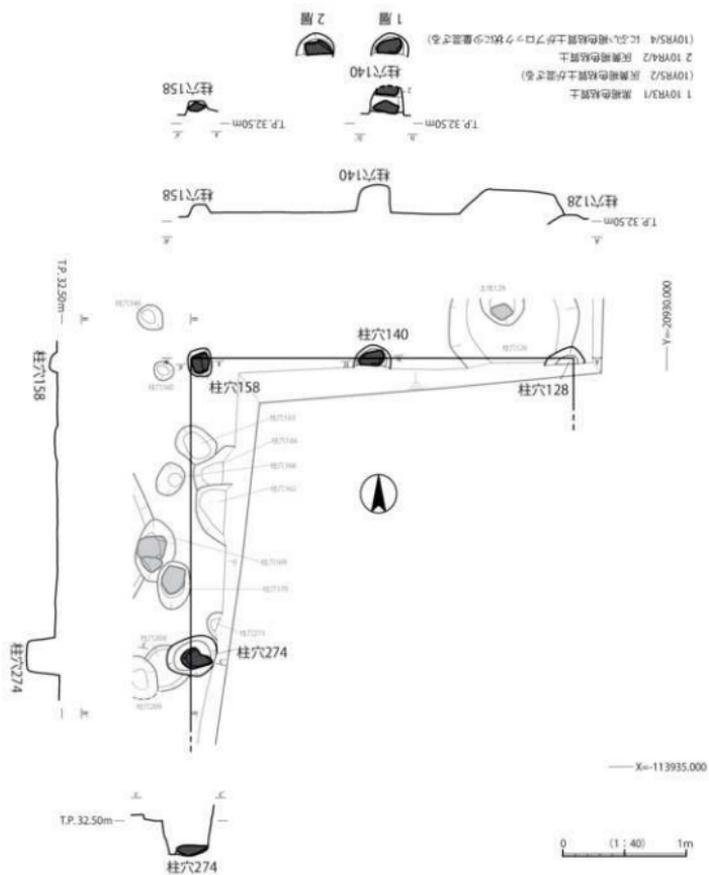


图 18 建物跡 8 平・断面図 (1 : 40)

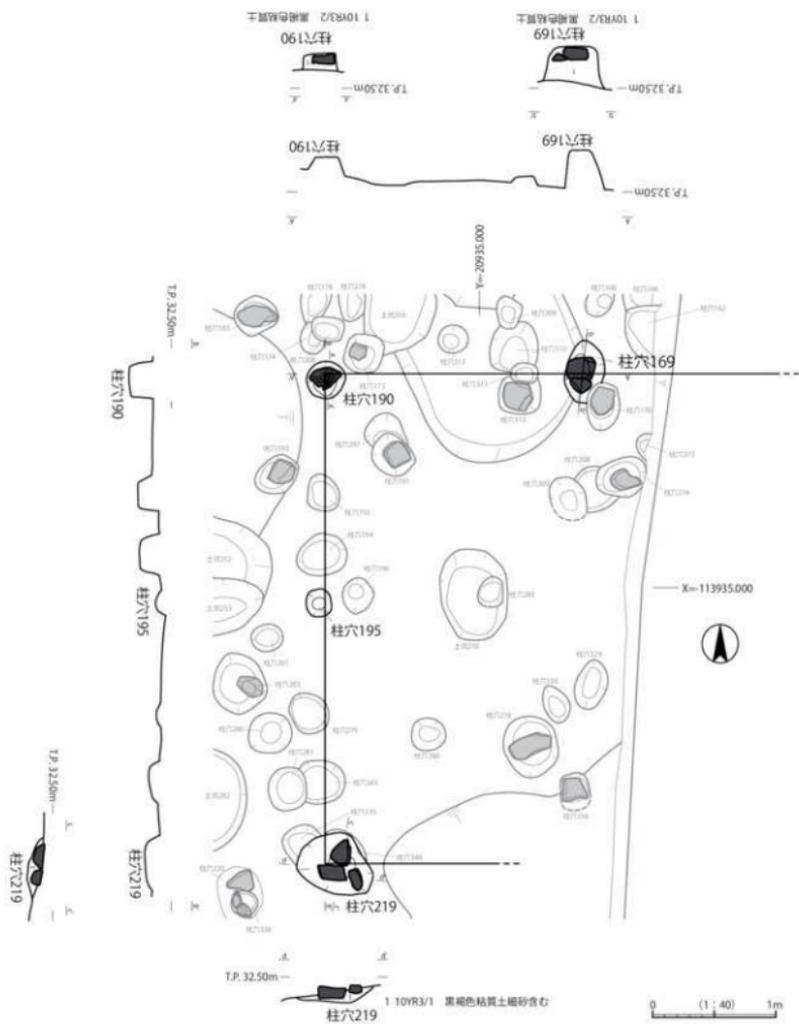


图 19 建物跡 9 平・断面図 (1:40)

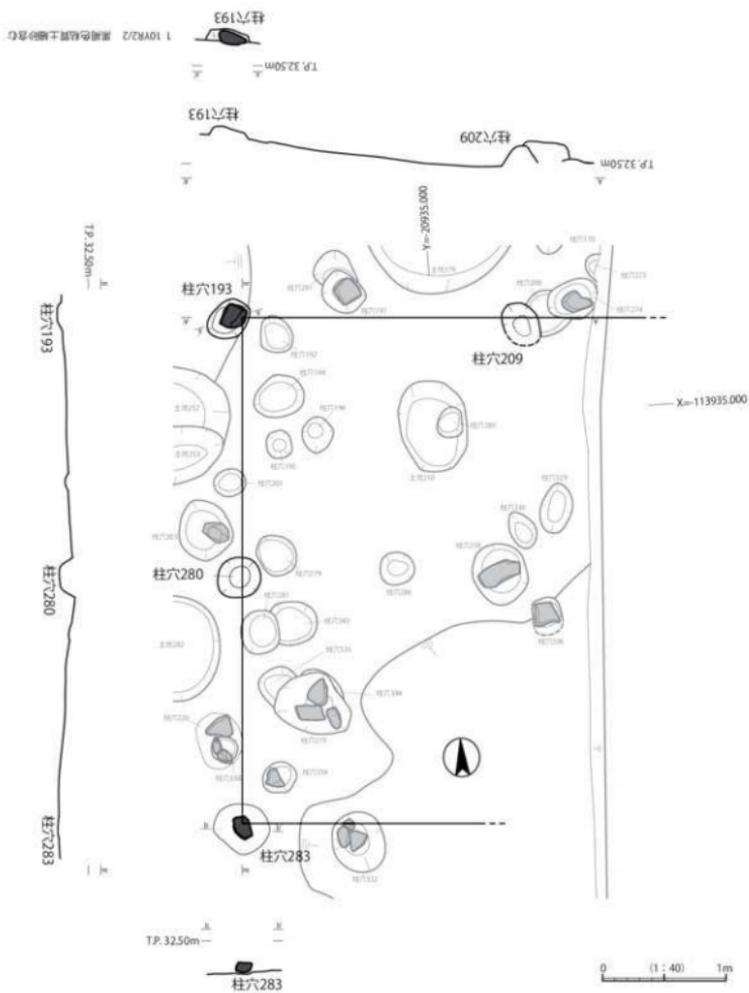


图 20 建物跡 10 平・断面图 (1:40)

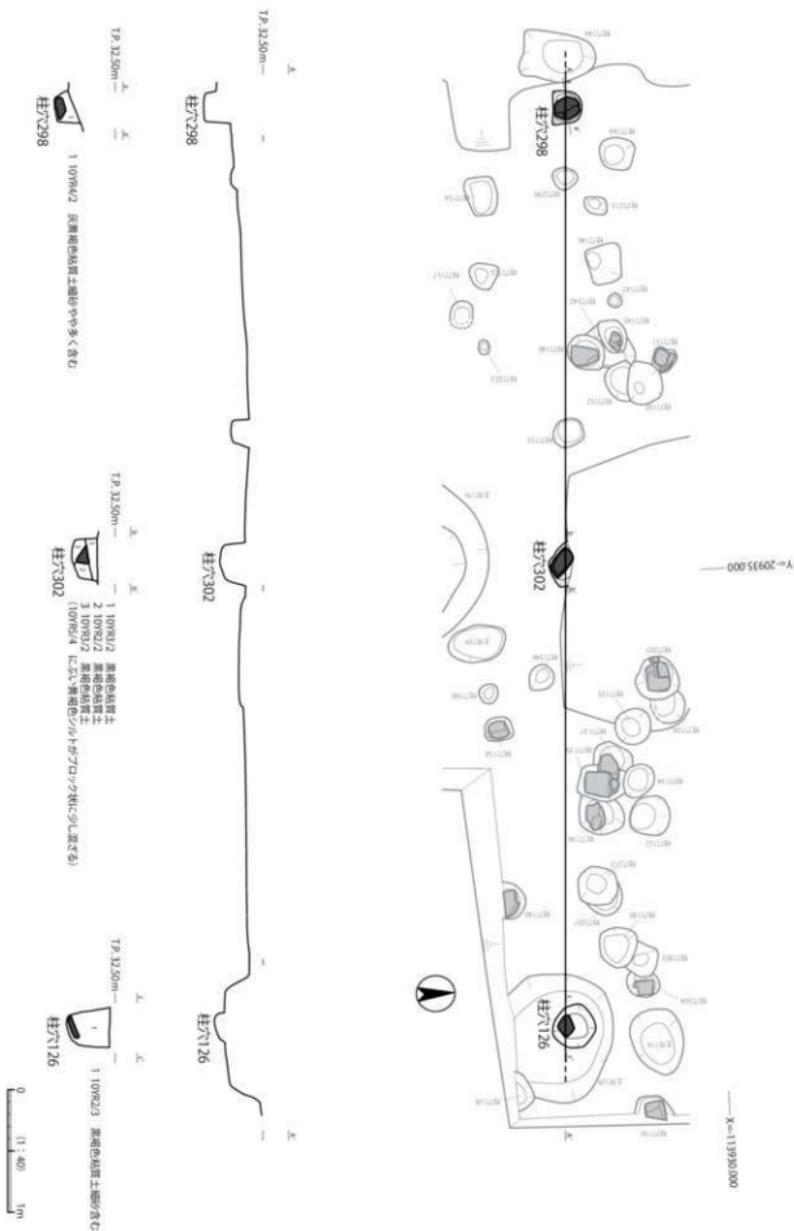


图 21 棚列 1 平・断面图 (1:40)

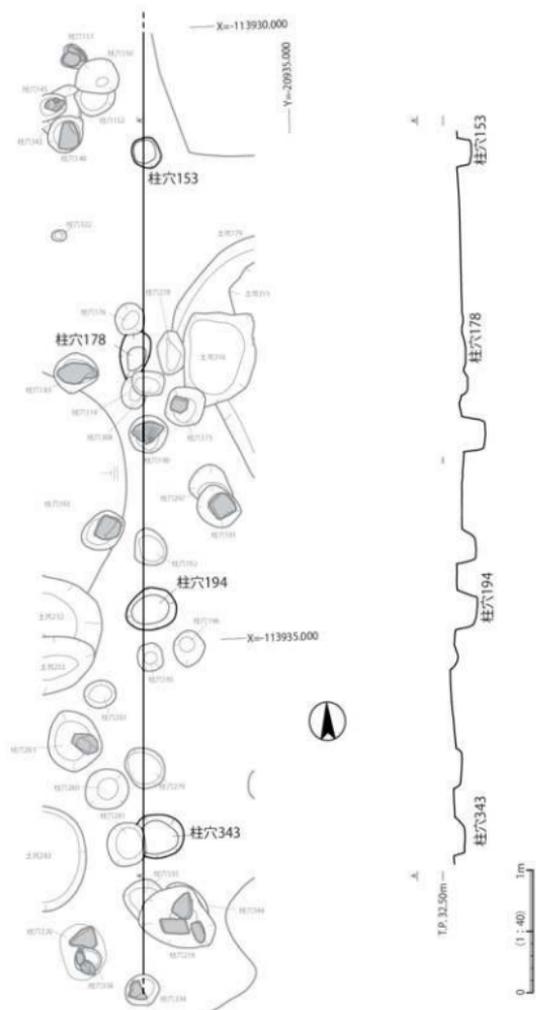


图 22 栅列 2 平·断面图 (1:40)

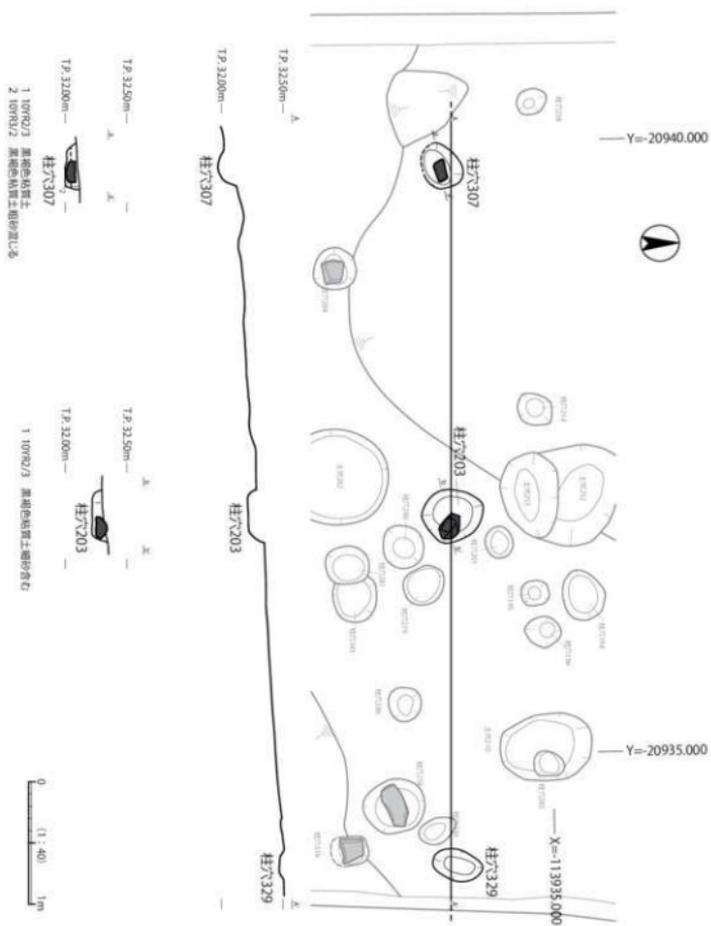


图 23 栅列 3 平·断面图 (1:40)

は出土していない。

柱穴 22 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.36m、短径 0.3m、深さ 0.08～0.1m である。柱痕跡は残っておらず抜き取られたものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土を主とする。遺物は土師器、瓦質土器が出土している。

柱穴 23 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で、長径 0.38、短径 0.32、深さ 0.15m である。柱痕跡が残っており、直径 0.16m である。埋土は掘方で黄褐色粘質土、柱痕跡で黒褐色粘質土を出す。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる瓦器が出土している。

柱穴 28 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.26m、深さ 0.14m である。柱痕跡が残っており、長径 0.2m、短径 0.14m である。埋土は黒褐色粘質土が主となる。東側は柱穴 24、柱穴 25 に切られ、南側は柱穴 27 を切る。遺物は出土していない。

礎石柱穴 61 (図 10、24 図版 3) 調査区北東で検出した礎石の残る柱穴である。長径 0.36m、短径 0.3m、深さ 0.12m である。礎石は長軸 0.15m、短軸 0.12m、厚さ 0.07m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。東側は攪乱に切られる。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、土師質土器、焼締陶器、瓦質土器、瓦が出土している。

柱穴 65 (図 10、25 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.48m、短径 0.42m、深さ 0.12～0.15m である。柱は抜き取られたと考えられる。北西を柱穴 66 に切られる。埋土は黒褐色粘質土を主とする。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、瓦質土器が出土している。

柱穴 73 (図 10、25 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.32m、短径 0.28m、深さ 0.16m である。柱痕跡が残っており、長径 0.18m、短径 0.14m である。埋土は黒褐色粘質土が主である。西側は柱穴 259 を切る。遺物は須恵器が出土している。

柱穴 83 (図 10、25 図版 3) 調査区中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.14m、深さ 0.1m である。柱痕跡が残っており、径 0.12m である。埋土は黒褐色粘質土が主となる。南側は柱穴 91 に切られる。遺物は土師器、銭貨が出土している。

柱穴 89 (図 10、24 図版 3) 調査区中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.32、短径 0.28m、深さ 0.18m である。柱痕跡が残っており、長径 0.12m、短径 0.1m である。埋土は黒褐色粘質土を主とする。西側は柱穴 91 に切られる。遺物は出土していない。

柱穴 91 (図 10、24 図版 3) 調査区中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.34m、短径 0.32m、深さ 0.12m である。柱痕跡が残っており、直径 0.08m である。埋土は黒褐色粘質土を主とする。遺物は出土していない。

柱穴 111 (図 10、25 図版 4) 調査区中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.38m、短径 0.32m、深さ 0.32m である。柱は抜き取られたと考えられるが、底部には礎石状に平瓦が置かれていた。埋土は黄褐色粘質土が主である。遺物は丸瓦が出土している。

柱穴 166 (図 10、25 図版 3) 調査区中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.32m、短径 0.3m、深さ 0.21m である。柱痕跡が残っており、直径 0.12m である。埋土は掘方で灰黄褐色粘質土、柱痕跡で黒褐色粘質土を主とする。北側は柱穴 163、南側は柱穴 162 に切られている。東側は調査区外のため検出できなかった。遺物は土師器が出土している。

礎石柱穴 191 (図 10、25 図版 1) 調査区南中央で検出した礎石の残る柱穴である。検出面で長径 0.34m、短径 0.32m、深さ 0.3m である。礎石は長軸 0.19m、短軸 0.18m、厚さ 0.08m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、瓦が出土している。

柱穴 258 (図 10 図版 1) 調査区南東で検出した柱穴である。検出面で長径 0.26m、短径 0.2、深さ 0.08 m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器、焼締陶器、磚が出土している。

柱穴 259 (図 10、25 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.24m、深さ 0.1m である。柱痕跡が残っており、直径 0.1m である。埋土は掘方で黄褐色粘質土、柱痕跡で黒褐色粘質土を主とする。東側は柱穴 73 に切られる。遺物は土師器が出土している。

柱穴 260 (図 10、24 図版 3) 調査区北西で検出した柱穴である。検出面で長径 0.4m、短径 0.3m、深さ 0.3m である。柱は抜き取られたと考えられるが、底部に礎石状に平瓦が置かれていた。埋土は黒褐色粘質土が主である。北側は柱穴 13 に切られる。遺物は京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器が出土している。

土坑 45 (図 10 図版 3) 調査区北中央で検出した土坑である。検出面で長径 1.1m、短径 0.9m、深さ 0.06 ~ 0.13m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。東側は柱穴 47、柱穴 49、南側は柱穴 267 に切られる。遺物は京Ⅶ〔京都Ⅵ〕期と考えられる土師器、須恵器が出土している。

土坑 52 (図 10 図版 3) 調査区北東で検出した土坑である。検出面で長径 1.08m、短径 0.6m、深さ 0.1 m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。南側は攪乱に切られる。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期から京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、瓦質土器、白磁が出土している。

土坑 129 (図 10、25 図版 3) 調査区中央で検出した土坑である。検出面で長径 1.08m、短径 0.8m、深さ 0.28 である。埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土である。北側は柱穴 126、南西側は柱穴 128 に切られている。南側は調査区外のため検出できなかった。遺物は出土していない。

土坑 179 (図 10 図版 1) 調査区南西で検出した土坑である。検出面で長径 2.2m、短径 1.48m、深さ 0.03 ~ 0.05m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。内部を柱穴 309、柱穴 310、柱穴 311、柱穴 312、柱穴 313、土坑 315、土坑 316 に切られる。また、東南は柱穴 169 に切られる。遺物は京Ⅶ〔京都Ⅵ〕期から京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる土師器、須恵器、白磁、青磁、焼締陶器、瓦質土器が出土している。

土坑 315 (図 10 図版 1) 調査区南西で検出した土坑である。検出面で長径 0.98m、短径 0.7m、深さ 0.14 m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。南側は柱穴 309、西側は土坑 316 に切られる。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期から京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、須恵器、青磁、焼締陶器、瓦質土器が出土している。

土坑 316 (図 10 図版 1) 調査区南西で検出した土坑である。検出面で長径 0.84m、短径 0.54m、深さ 0.14m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。西側は柱穴 278、南西は柱穴 173 に切られる。遺物は京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期から京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器、須恵器、瓦質土器が、瓦が出土している。

2. II 期 (室町時代後半から江戸時代) の遺構

II 期の遺構には柱穴、土坑があり、土器編年で室町時代後半から江戸時代の京Ⅹ〔京都Ⅹ〕期から京Ⅺ〔京都Ⅺ〕期と考えられる遺物が出土している。後世の削平のためか遺構数は I 期に比べ大幅に減少している。遺物を出土していない遺構については、遺物を出土した遺構との埋土の類似性からこの時期

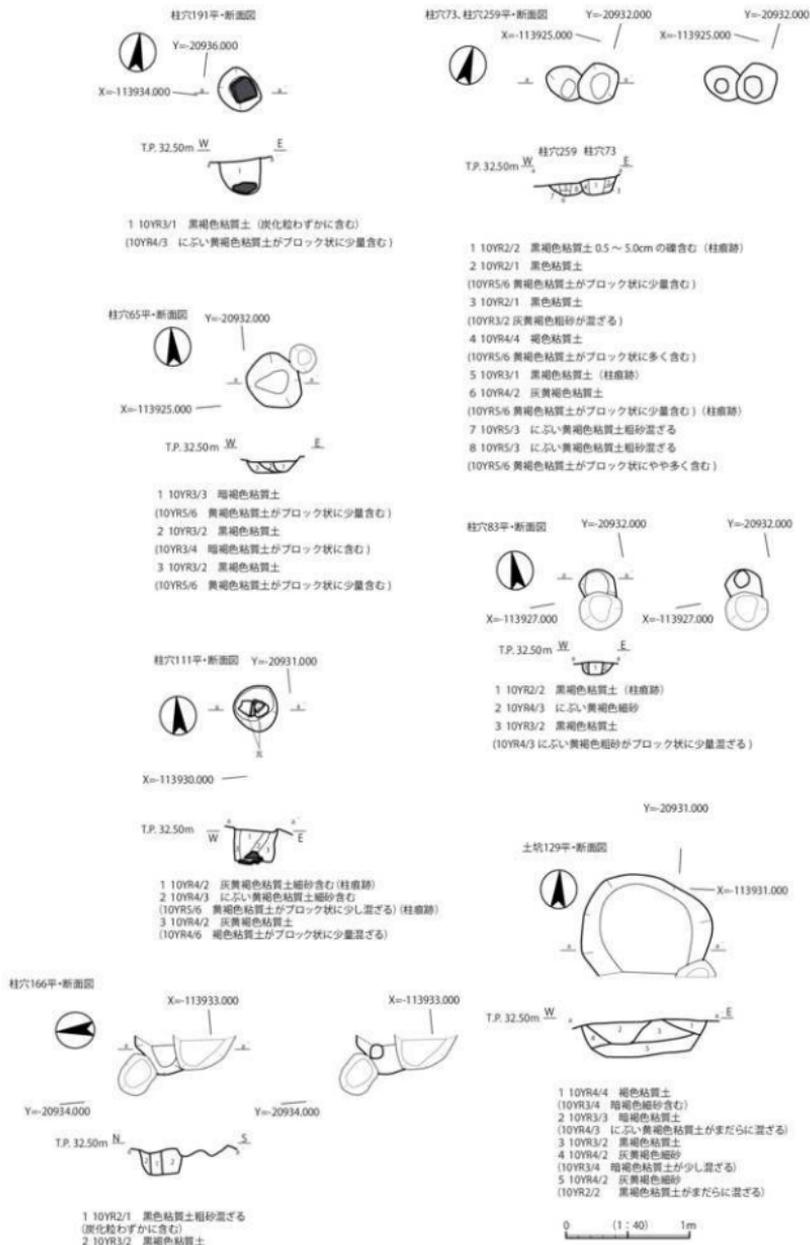


図 25 1期の遺構平・断面図 (2) (1:40)

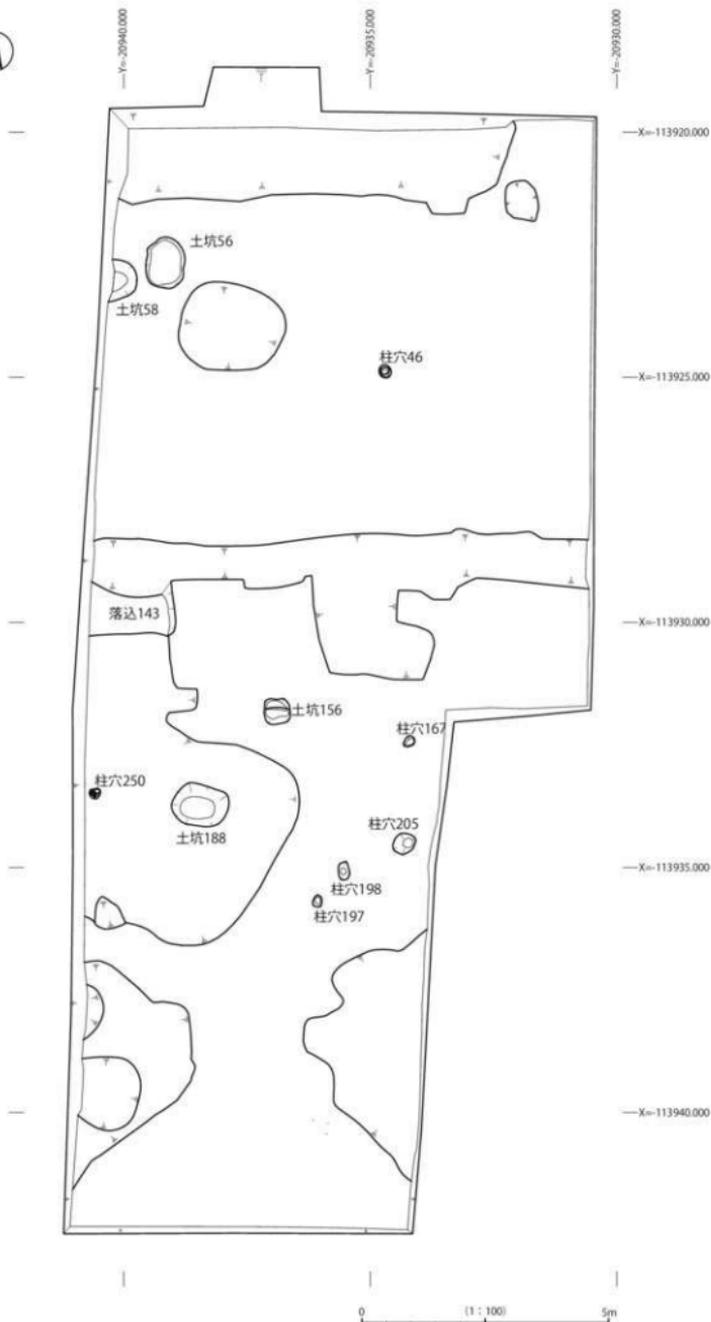


図 26 II期の遺構全体平面図 (1:100)

に入るものと判断した。

柱穴 46 (図 26、27 図版 3) 調査区北中央で検出した柱穴である。検出面で長径 0.38m、短径 0.28m、深さ 0.1m である。柱痕跡が残っており、直径 0.08m である。埋土は掘方で褐灰色粘質土、黄褐色粘質土、柱痕跡で黒褐色粘質土が主である。遺物は京 X〔京都 IX〕期と考えられる土師器、瓦質土器が出土している。

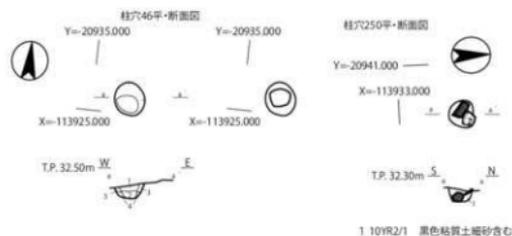
礎石柱穴 260 (図 26、27 図版 4) 調査区南東で検出した柱穴である。検出面で長径 0.22、短径 0.2、深さ 0.08m である。礎石が残っており、長軸 0.14m、短軸 0.07m、厚さ 0.07m である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は京 XI〔京都 X〕期と考えられる土師器、焼締陶器が出土している。

土坑 56 (図 26 図版 3) 調査区北東で検出した土坑である。検出面で長径 1.0m、短径 0.8m、深さ 0.05～0.08m である。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。遺物は京 X〔京都 IX〕期から京 XI〔京都 X〕期と考えられる土師器、施軸陶器、焼締陶器、瓦器、瓦質土器が出土している。

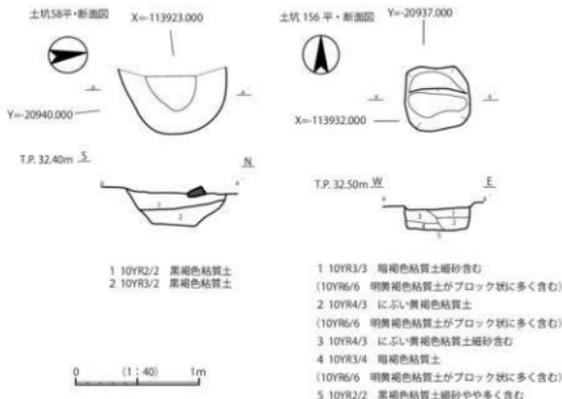
土坑 58 (図 26、27 図版 3) 調査区北東で検出した土坑である。検出面で長径 0.8m、短径 0.48m、深さ 0.27m である。埋土は黒褐色粘質土が主である。遺物は京 X〔京都 IX〕期と考えられる土師器、京 VII〔京都 VII〕と考えられる土師器、須恵器、土師質土器が出土している。

土坑 156 (図 26、27 図版 3) 調査区南東で検出した土坑である。検出面で長径 0.54m、短径 0.5m、深さ 0.1～0.2m である。埋土は暗褐色粘質土、黄褐色粘質土が主である。遺物は京 X〔京都 IX〕期と考えられる土師器、京 VII〔京都 VII〕と考えられる土師器、青磁が出土している。

土坑 188 (図 26 図版 1) 調査区南東で検出した土坑である。検出面で長径 1.1m、短径 0.8m、深さ 0.3～0.4m である。埋土は灰黄褐色の単層である。遺物は京 XI〔京都 X〕期と考えられる土師器、瓦質土器、瓦、近世の染付が出土している。



- 1 10YR3/2 褐色粘質土 (柱痕跡)
- 2 10YR2/1 黒色粘質土 (柱痕跡)
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質土粗砂混ざる
- 4 2.5Y5/4 黄褐色シルト



- 1 10YR2/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土粗砂含む
- (10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に多く含む)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- (10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に多く含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土粗砂含む
- 4 10YR3/4 暗褐色粘質土
- (10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に多く含む)
- 5 10YR2/2 黒褐色粘質土粗砂や中々多く含む

図 27 II 期の遺構平・断面図 (1:40)

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回出土した遺物はコンテナパットに7箱で、土師器、須恵器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、近世陶磁器、瓦器、瓦質土器、石製品、銭貨、瓦が出土している。遺物の時期は弥生時代、平安時代末期（京Ⅶ|京都Ⅵ|期）から江戸時代の遺物が出土している。

出土した遺物で中心となる時期は鎌倉時代から室町時代（京Ⅷ〔京都Ⅶ〕から京Ⅸ期〔京都Ⅷ〕）で、その前後の時期の遺物が少量出土している。また、弥生時代の遺物は小破片が1点出土しただけであるが、北接する十条通の発掘調査でも弥生時代の遺物が出土しているため弥生時代に何らかがあった可能性は考えられる。

表1 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	土師器				
平安時代	土師器、瓦、銭貨		銭貨1点		
鎌倉時代から室町時代	土師器、須恵器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦器、瓦質土器、石製品、瓦		土師器41点、輸入磁器3点、焼締陶器1点、施釉陶器2点、瓦器7点、瓦5点、磚2点、石製品1点		
江戸時代	磁器、瓦				
合計		7箱	63点(2箱)		5箱

第2節 出土遺物

1. I期の遺構出土土器

土坑45出土土器（図28 図版8）1は土師器の皿である。口縁部の器壁は厚く、底部は薄くなる。体部は外反しながら立ち上がる。京Ⅶ〔京都Ⅵ〕期と考えられる。

柱穴125（図28 図版8）2は瓦器椀である。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は上方に向かい、口縁端部の内面には沈線がみられる。内面にはヘラミガキが施され、外面にはユビオサエの痕が残る。13世紀代と考えられる。

柱穴61出土土器（図28 図版8）3、4は土師器の皿である。3は口縁部から体部の器壁は厚く、底部は薄くなる。体部は外反しながら立ち上がる。4は口縁部の器壁は厚く、底部に向かって薄くなる。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部の断面は尖り気味で、上方に向かう。共に京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。

柱穴 191 (図 28 図版 8) 5、6 は土師器の皿である。5 の体部はやや外反して立ち上がる。底部を僅かに立ち上げ体部から口縁部を成形しているため器高は低い。6 の体部は外反して立ち上がる。底部と体部の境にはヨコナデによる段がみられる。京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。

柱穴 208 出土土器 (図 28 図版 8) 7 は口縁部から体部の器壁は厚く、底部はやや薄い。体部は外反しながら立ち上がる。体部と底部の境目に段がつく。京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。8 は瓦器の羽釜である。鈔部は短く、口縁はやや内傾しながら短く立ち上がる。口縁端部に面を持つ。内面には刷毛目がみられ、体部外面には指頭圧痕が残る。

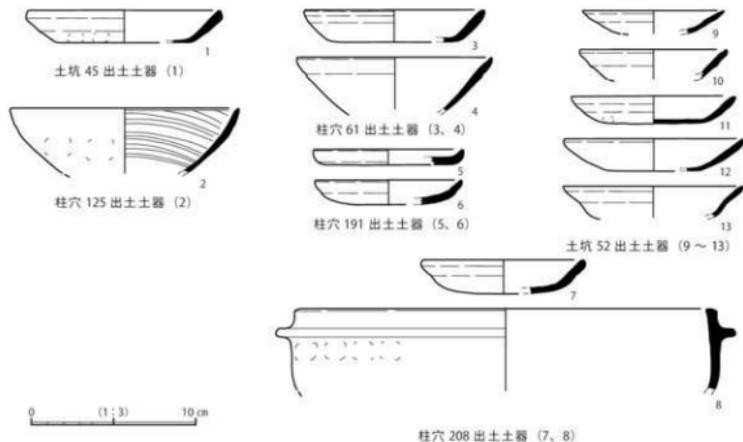


図 28 Ⅰ期の遺構出土土器 (1) (1:3)

土坑 52 出土土器 (図 28 図版 5, 8) 9 ~ 13 は土師器の皿である。9 の体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部の断面は尖り気味である。10 の体部は外反しながら立ち上がる。口縁部と体部の境目にヨコナデによる段がつく。口縁端部内面にはヨコナデによる凹みが巡る。11 は口縁部の器壁は厚く、底部は薄くなる。体部外面は外反しながら立ち上がり、口縁端部の断面はやや尖り気味である。12 は口縁部の器壁は厚く、底部は薄くなる。体部外面は外反しながら立ち上がり。口縁部は三角形を呈する。13 の体部下位は外反しながら立ち上がり、上位から口縁部にかけては屈曲しながら外反して立ち上がる。いずれも京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。

土坑 179 (図 29 図版 5, 6, 8, 9) 14 ~ 30 は土師器の皿である。14 の体部は外反しながら立ち上がる。体部と底部との境目にはヨコナデによる段がつく。15 の体部は外反しながら立ち上がる。底部と体部との境目にはヨコナデによる段がつく。16 の体部は外反して立ち上がる。口縁端部の断面はやや三角形を呈す。17 の体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部の断面は尖り気味である。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。18 の体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部はやや丸みを帯びる。19 の体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に向かってやや開く。20 の体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部の断面は三角形を呈する。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。21 は口縁部から体部にかけて器壁は厚く、底部は薄くなる。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は三角形を呈す。22 の体部は外反しながら立ち上がる。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。23 の体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方に向かう。

24 は口縁部から体部にかけて器壁は薄くなり、底部は薄い。体部は外反しながら立ち上がり、口縁は外側に向かってやや開く。口縁部と体部の境目にはヨコナデによる段がつく。25 は口縁部から体部にかけて器壁は厚く、底部は薄い。体部はやや外反しながら立ち上がり、体部上位から口縁部にかけて外側に向かってやや開く。口縁端部は三角形状を呈す。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。26 は口縁部から体部にかけては器壁は厚く、底部は薄い。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部の断面は尖り気味である。27 は口縁部から体部にかけて器壁が薄くなる。体部はやや外反して立ち上がる。口縁端部は断面が三角形状を呈す。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。28 の体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや上方に向かう。29 は口縁部から体部にかけて器壁は厚く、底部は薄い。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや上方に向かう。30 は口縁部から底部にかけて器壁が薄くなる。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや上方へ向かう。いずれも京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。31 は白磁の椀である。体部上位は大きく外反し、口縁端部にかけて大きく開く。軸は体部内面から外面にかけて施されている。体部内面には型文がみられ、軸はやや青味がかった。14 世紀代のものかと考えられる。32 は瓦器の羽釜である。鈔部のみであるが

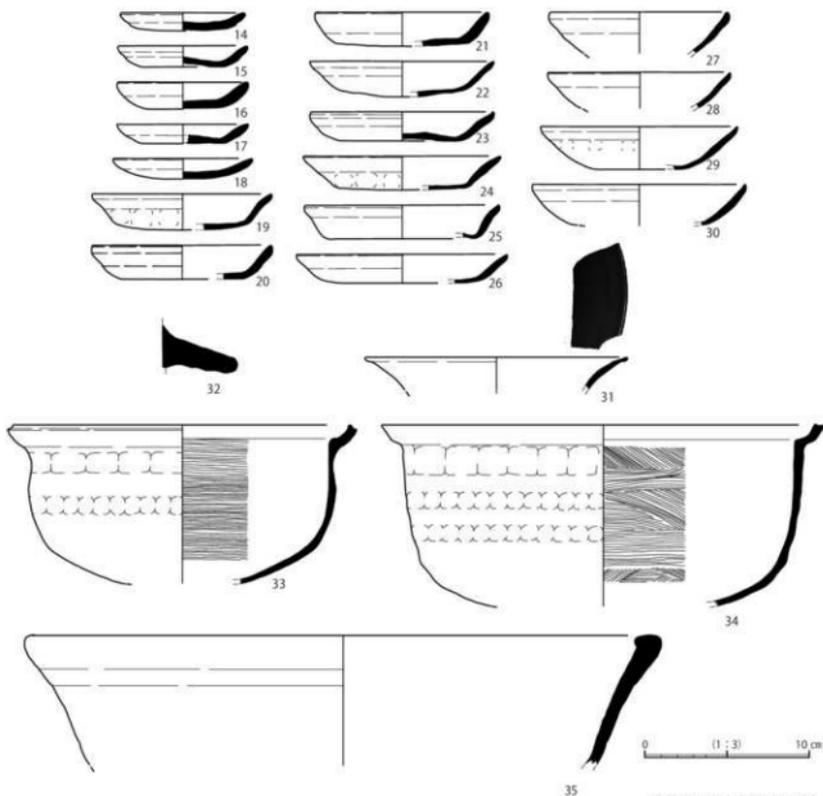


図 29 I 期の遺構出土土器 (2) (1:3)

土坑 179 出土土器 (14-35)

径は48cm程になるとみられ、大型の羽釜と考えられる。33は瓦器の鍋である。体部は丸みを持って上方に立ち上がり、口縁は外側斜め方向に立ち上がる。横方向のナデによって口縁端部内側は上方に立ち上がり、上面は凹む。体部内面には刷毛目がみられ、外面には指頭圧痕が残る。34は瓦器の鍋である。体部は直線的に上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。口縁端部上面は横方向のナデによって凹む。体部内面には刷毛目がみられ、外面には指頭圧痕がこのる。35は瓦質土器の盤である。口縁部は僅かに外反し、端部上面に面を持つ。

土坑315出土土器(図30 図版7, 9) 36~39は土師器の皿である。36の口縁部の器壁は厚く、底部は薄い。体部は外反して立ち上がり、口縁端部はやや上方に向かう。体部上位と下位との境目にはヨコナデによる段がつく。37の体部の器壁は厚く、底部は薄い。体部下位は外反しながら立ち上がり、上位から口縁部にかけて屈曲しながら開く。口縁端部はやや上方に向かう。38の口縁部から体部にかけては器壁が厚く、底部は薄い。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや上方に向かう。39の口縁部の器壁は厚く、底部にかけて薄くなる。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方に向かう。京Ⅷ〔京都Ⅶ〕期と考えられる。40は龍泉窯系の青磁の杯である。やや大型で、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外側に折られる。口縁端部は上方に向かう。底部内面には双鱼文、体部外面には蓮弁文がある。大宰府分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類に近く、13世紀中頃から14世紀初頃と考えられる。

土坑316出土土器(図30 図版9) 41は瓦器の羽釜である。体部は直線的で、口縁部は鈎部から短く内傾して立ち上がる。鈎部は短い。口縁部内側には横方向のナデによる凹みがつく。体部内面には刷毛目がみられ、外面には指頭圧痕が残る。

柱穴169出土土器(図30 図版6) 42~44は土師器の皿である。42の体部は外反しながら立ち上がる。口縁部はやや厚みを持ち、断面は三角形状を呈す。43は体部は外反して立ち上がり、体部上位から口縁端部にかけて外に向かってやや開く。口縁端部の断面は尖り気味である。44はいわゆる「へそ皿」で、体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は外側に向かってやや開く。京Ⅹ〔京都Ⅷ〕期と考えられる。45は龍泉窯系の青磁の杯である。やや大型で、体部は丸みを持って外反して立ち上がり、口縁部は外



図30 I期の遺構出土土器(3)(1:3)

側に大きく開く。口縁部は花形状に造られている。断面形態から大宰府分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類に近く、13世紀中頃から14世紀初頃と考えられる。

2. II期の遺構出土土器

土坑56出土土器(図31 図版6)46～48は土師器の皿である。46は底部内面周縁には押さえによる凹みが巡る。体部は外反して立ち上がり、体部上位から口縁部端部にかけて外側に向かって開く。京X〔京都IX〕期と考えられる。47は口縁部から体部の器壁は厚く、底部は薄い。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に向かって折られる。京X〔京都IX〕期と考えられる。48は体部は外反しながら立ち上がり、口縁部端部はやや上方に向かう。京IX〔京都VIII〕期と考えられる。49は瀬戸美濃系の灰釉陶器の三足の香炉である。体部下位は丸く、上位は上方に立ち上がる。口縁部は外側に折られる。底部外面には糸切り痕が残る。15世紀代のもと考えられる。

土坑156出土土器(図31 図版7, 9)50は土師器の皿である。体部は外反して立ち上がり、口縁部は外側に向かって大きく開く。口縁部端部はやや上方に向かう。京X〔京都IX〕期と考えられる。

柱穴250出土土器(図31 図版6, 9)51は土師器の皿である。体部は丸みを持って外反しながら立

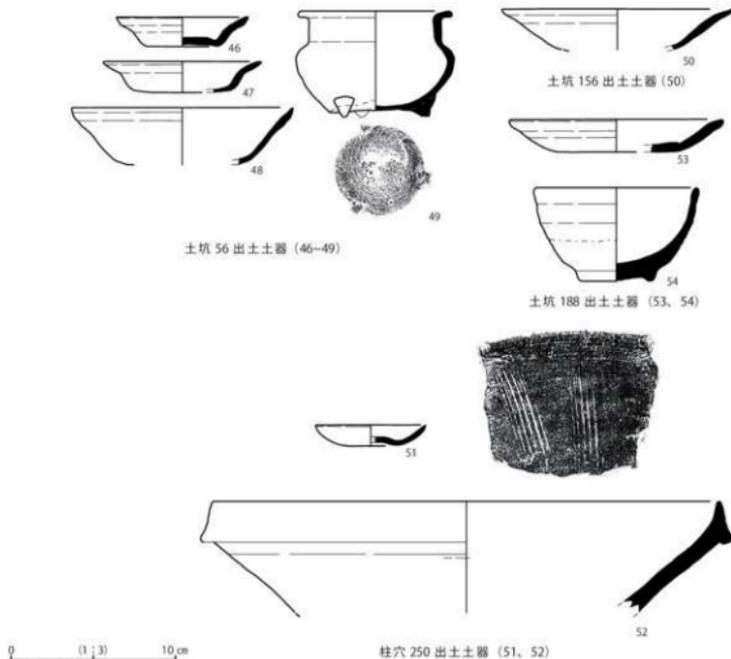


図31 II期の遺構出土土器(1:3)

ち上がる。口縁端部は尖り気味である。口縁部から体部内面にかけてはナデられている。京XI〔京都X〕期のと考えられる。52は備前焼の播鉢である。体部は外側に直線的に開き、口縁端部は上方に立ち上がる。体部内面の摺目は6条1単位である。15世紀後半代から16世紀代のもと考えられる。

土坑188出土土器(図31 図版7.9)53は土師器の皿である。底部内面周縁には圏線状の凹みが巡る。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は外側に開く。京XI〔京都X〕期と考えられる。54は肥前系の陶器の椀である。体部は上方に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部内面から体部上位にかけては施釉されている。16世紀後半のものと考えられる。

3. I期の遺構出土瓦類、石製品、銭貨

柱穴13出土瓦、碑(図32 図版9)55は平瓦である。凹面、凸面共に横方向のナデの後、側縁付近を縦方向にナデられている。凸面後端には僅かに糸切り痕が残る。56は薄手の碑である。上面、下面共にナデられている。

柱穴111出土瓦(図32、33 図版9、10)57は丸瓦である。凹面には粗目の布目痕が残り、凸面は部分的に縦方向にナデられているが、縄叩痕が残る。凹面の側縁から幅1.3cm程は面取りされている。58は丸瓦である。凹面には布目痕が残り、凸面は横方向にナデられている。凹面の布目には布が寄った痕がみられる。59は平瓦である。凹面、凸面共に縦方向にナデられてい。凹面には部分的に布目痕が残る。凸面には溝状の線が斜めにつけられている。

柱穴191出土瓦(図33 図版10)60は平瓦である。凹面、凸面共に糸切り痕が残る。凹面には布目痕が残り、凸面は部分的に縦方向にナデられている。

柱穴258出土碑(図33 図版10)61は碑である。上面はナデられており、下面には縄叩痕が残る。側面には工具によって孔が穿たれている。

柱穴190出土石製品(図34 図版7)62は石臼である。上面が凹み、挽き手を取り付ける部分、軸受け、もの入れがあるため、上臼の1部分である。花崗岩製である。

柱穴83出土銭貨(図34 図版10)63は北宋銭である。「太平通宝」で太平興国元(976)年初鑄である。

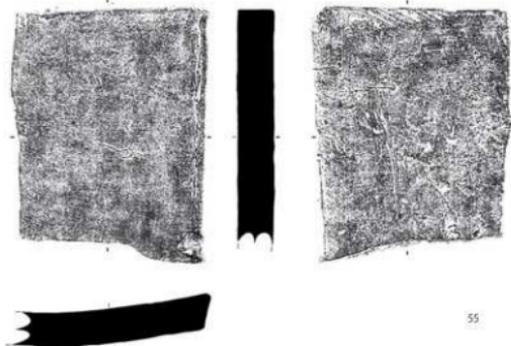
<参考文献>

各遺物の編年及び年代観は凡例で示した文献の他、以下の文献の基準も参照して記した。

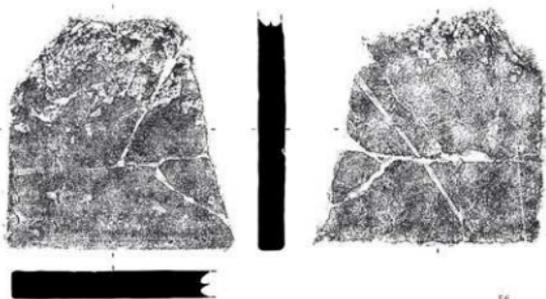
太宰府市教育委員会『太宰府市の文化財第49集 太宰府染坊XV—陶磁器分冊編—』2000年

岡山県古代古墳文化財センター編『山崎古窯跡』岡山県教育委員会2002年

財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター『遺跡跡 本文図』2005年

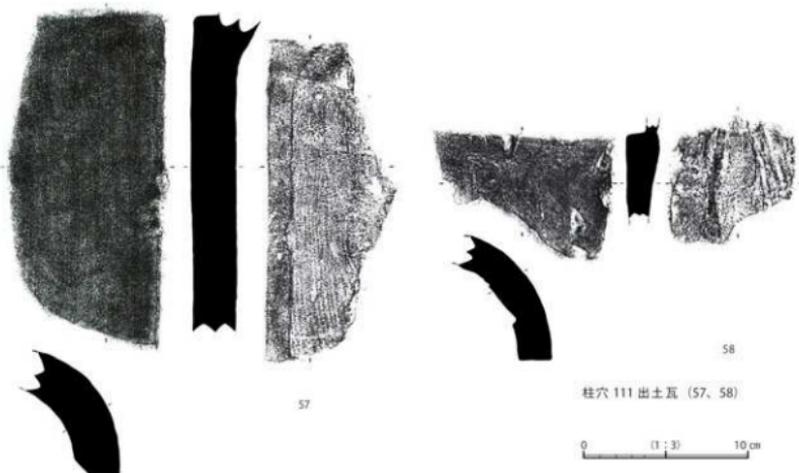


55



56

柱穴 13 出土瓦、磚 (55、56)



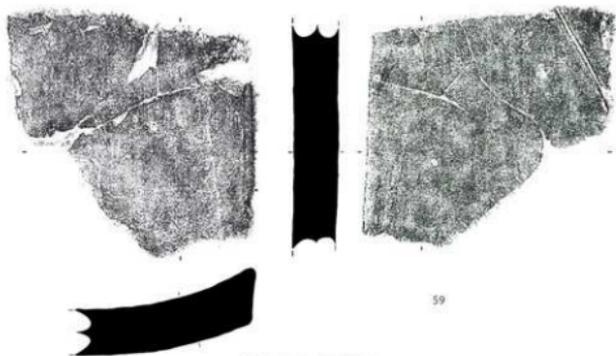
58

柱穴 111 出土瓦 (57、58)

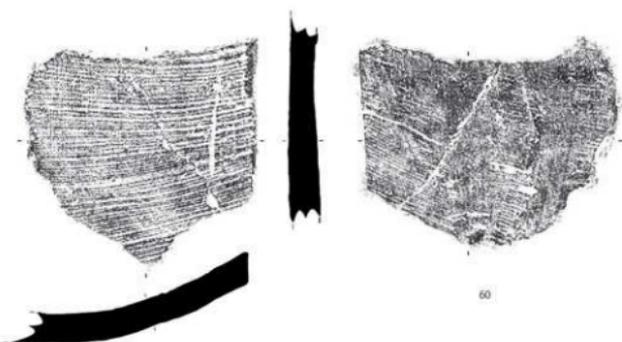
57

0 (1:3) 10 cm

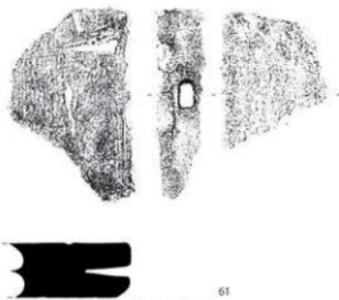
図 32 I 期の遺構出土瓦類 (1) (1:3)



柱穴 111 出土瓦 (59)



柱穴 191 出土瓦 (60)



柱穴 258 出土磚 (61)

0 (1:3) 10cm

図 33 I 期の遺構出土瓦類 (2) (1:3)



62

柱穴 190 出土石製品 (62)



63

柱穴 83 出土銭貨 (63) (1:1)



図 34 I 期の遺構出土石製品 (1:3)、銭貨 (1:1)

第5章 総括

今回、発掘調査を実施した京都市本町二丁目441-1ほかは法性寺跡推定寺域内に相当し、調査地は寺域内の南辺に位置している。同町内では公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所により1980年、1988年、1997年、1999年、2010年に発掘調査^(註14)が実施されている。

いずれの調査でも法性寺跡に直接関連する遺構の検出はされていないが、各発掘調査の成果によってこの地域では弥生時代から江戸時代の遺構、遺物が検出されている。特に北接する十条通の発掘調査(図35)では伏見人形の窯跡が検出しており、当調査地でも関連する遺構もしくは遺物が確認される可能性があったが、後世の削平の影響のためか近世の遺構はほとんど検出できなかった。また、法性寺跡に直接関連する遺構も検出できなかった。

今回の発掘調査において主体となったのは鎌倉時代後半から室町時代前半、土器編年で京Ⅶ〔京都Ⅶ〕期から京Ⅸ〔京都Ⅸ〕期の遺構である。検出した遺構の中では柱穴が多数を占めていた。礎石が残るものが比較的多く、検出面で礎石が露出しているものもあった。

その他、平安時代末期から鎌倉時代前半、土器編年で京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる遺物、室町時代後半、土器編年で京Ⅹ〔京都Ⅹ〕期から京Ⅺ〔京都Ⅺ〕期と考えられる遺物、江戸時代の遺物を出土した遺構が少数ある。

以下、平安末期から室町時代前半の遺構をⅠ期、室町時代後半から江戸時代の遺構をⅡ期として総括を記す(図36)。

Ⅰ期 Ⅰ期の遺構は今回検出した遺構の中で多数を占め、特に鎌倉時代後半から室町時代前半の柱穴が大多数を占めている。その中では建物跡が10棟、柵列が3列復元でき、遺物を出土した遺構では土器編年で京Ⅶ〔京都Ⅶ〕期、京Ⅷ期〔京都Ⅷ〕期、京Ⅸ〔京都Ⅸ〕期に大きく分かれる。そこで、土器編年に従って遺構の時期をⅠ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3、とする。

Ⅰ-1では柱穴145、土坑45がある。時期としては、法性寺が最盛期を過ぎ、寛元元年(1243年)に九条道家による東福寺創建後の初期の段階に当たる。

Ⅰ-2では建物跡4棟、柵列1列が復元できる。建物跡はいずれも東西2間以上、南北2間の東西棟柵列は南北3間以上になると考えられる。建物跡、柵列は東へ0.5°~2.3°振れる。土坑179では京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期から京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期と考えられる土師器とそれに伴って、須恵器、白磁、青磁、焼締陶器、瓦質土器が出土している。検出面からは浅く、柱穴169、柱穴309、柱穴310、柱穴311、柱穴312、柱穴313、土坑315、土坑316と京Ⅷ〔京都Ⅷ〕期、京Ⅸ〔京都Ⅸ〕期と考えられる遺構に切られるため、大型の土坑と考えるよりは当時の整地土の名残の可能性もある。また土坑294は遺物の出土量が少なく、切っている遺構は柱穴323しかないが同様に整地土の可能性もある。

時期としては法性寺が衰退し替わって東福寺が法性寺旧寺域を領有することを認められ、朝廷方と鎌倉幕府方との争乱を経て、南北朝の対立の中で室町幕府が成立する時期に当たる。

Ⅰ-3では建物跡6棟、柵列2列が復元できる。建物跡6、9、10は東西2間以上、南北2間の東西棟、建物跡5は東西2間、南北3間、建物跡8は東西2間、南北2間以上の南北棟になると考えられる。柵列1、3は東西2間以上になると考えられる。建物跡、柵列は東へ0°~3°振れる。

時期としては『東福寺文書』^(註15)において法性寺八町または法性寺大路八町と記され、朝廷、幕府

から寺域内の検断を認められたことがわかる時期である。この法性寺大路とは法性寺旧寺域内で、東福寺門前を南北に縦断する大路と考えられている。その路は現在の木町十丁目から二十二丁目までの南北に走る本町通であると推定されている。中世以降は、その法性寺大路に面して町々が発達したと考えられている^(註16)。

I-2、I-3での柱穴の特徴は建替え、もしくは建直しに際して、ほぼ同一の位置が同一の柱穴が利用されていることが挙げられる。土層断面で確認すると柱穴4では3回、柱穴140では2回と礎石が重ねられて置かれていた。また柱穴17と柱穴340、柱穴245と柱穴341、柱穴109と柱穴261、柱穴135と柱穴137、柱穴219と柱穴344、柱穴220と柱穴338と上下の切り合い関係の中で重なるものがある。柱穴109と柱穴261では土層断面で礎石の重なりが、柱穴135と柱穴137については礎石そのものが重なっていることが確認できた。他の柱穴は位置がずれて切り合っているため、これら柱穴は建替え、もしくは建直しに際して基準の柱穴とされた可能性が考えられる。

また、建物跡、柵列はやや東に振れるものが多く、既存の発掘調査によって検出された建物跡同様に紀伊郡の条里の振れに影響を受けたものと考えられる。紀伊郡の条里は北に向かうほど東に振れるようである^(註17)。

Ⅱ期の遺構は少数であるが室町時代後半から江戸時代の遺構を検出した。柱穴、土坑を検出し、室町時代後半の遺構は土器編年で京X〔京都IX〕期から京XI〔京都X〕期、江戸時代に大きく分けられる。ここでは少数のため室町時代後半の遺構をⅡ-1、江戸時代の遺構をⅡ-2とする。

Ⅱ-1では柱穴、土坑がある。遺構数は激減しており、特徴のある遺構は、柱穴250(京XI〔京都X〕期)で、礎石が残っていた。他には柱穴46(京X〔京都IX〕期)で、柱痕跡のみが残っており、礎石はなかった。

時期としては『東福寺文書』において、幕府から東福寺に対し法性寺八町の検断権、酒麴諸商売役銭人夫以下臨時課役等免除を認められていた時期である。また東福寺門前町として法性寺大路沿いが発達する時期である。

Ⅱ-2では落込143がある。土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土しており、磁器、瓦が江戸時代のものであると考えられる。南側は削平されているが、調査区内の落込に堆積した埋土であるため、近世の整地土と考えられる。

時期としては豊臣秀吉が伏見城を築城以後、法性寺大路が現在では伏見街道と呼ばれる街道となった時期である。江戸時代に入り、伏見人形の窯元や販売業者が出現する。

今回、当調査地において法性寺創建時から最盛期に当たる平安時代の遺構は検出できなかったため、その時期の様相は不明瞭である。しかし、法性寺旧寺域を踏襲した東福寺の創建以降は今回の発掘調査で検出した柱穴群、また文献から法性寺大路に沿う門前町として活発な開発がなされていたことは推察できる。

〈参考文献〉

(註14) (註1) - (註6) に同じ

(註15) 史料は以下の文献を参照した

(註7) 京都市『史料京都の歴史 第10巻 東山区』平凡社1987年

東京大学史料編纂所『東京大学史料編纂所データベース』

(註16) (註7) に同じ

(註17) (註7) 風山敏夫「法性寺の位置について」『佛敎藝術学』100 毎日新聞社1975年



Y=20960.000

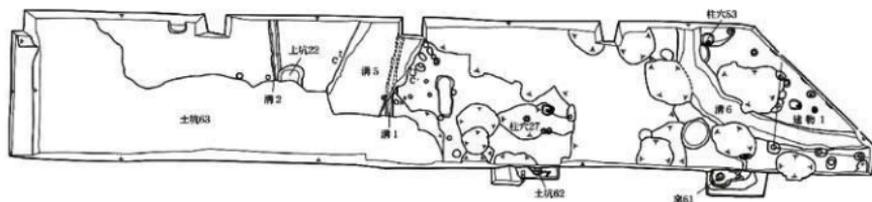
Y=20950.000

Y=20940.000

Y=20930.000

X=113900.000

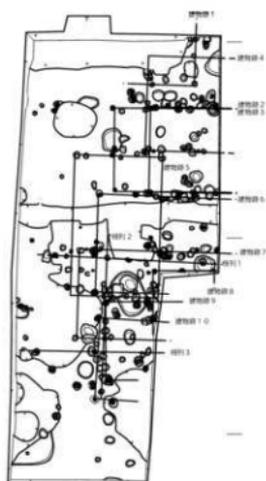
2010年発掘調査1区



X=113920.000

X=113930.000

X=113940.000



今回発掘調査地

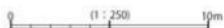
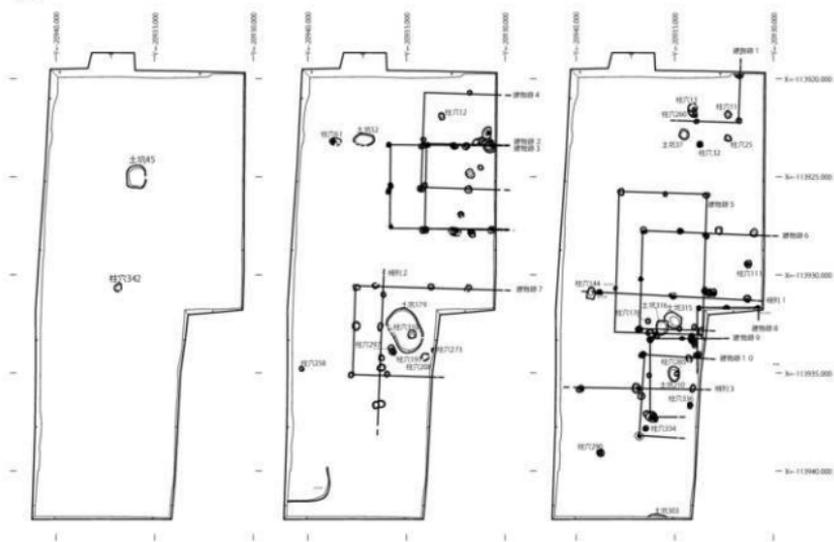


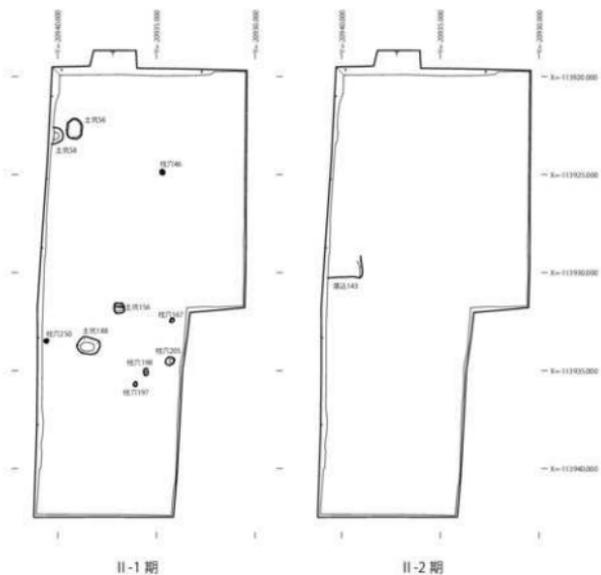
図35 2010年発掘調査地と今回調査地の位置関係 (1:250)



I-1期

I-2期

I-3期



II-1期

II-2期

0 (1 : 250) 10m

図36 調査地遺構変遷図 (1 : 250)

表2 遺物観察表

単法量のカッコ内は土部の口径・底径は復元、器高は残存、瓦はいずれも残存

発掘層 No.	出土遺物	器種	形状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	形成技法の特徴	色調	胎土	備考
Ⅱ-28-1	土坑 45	土師器	皿	(12)	(2)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：7.5YR7/6 褐色	粗	12 世紀後半～ 13 世紀前半
Ⅱ-28-2	柱穴 125	瓦器	椀	(3.6)	(4)		内面、へうミガキ 外面、口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ	内径 2.5Y3/1 黒褐色	密	13 世紀代
Ⅱ-28-3	柱穴 61	土師器	皿	(11)	(2)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：10YR8/3 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-4	柱穴 61	土師器	皿	(11.8)	(3.3)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR8/4 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-5	柱穴 191	土師器	皿	(9)	(1)		内面は、ヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：10YR7/4 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-6	柱穴 191	土師器	皿	(9)	(1.5)		内面は、ヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/6 褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-7	柱穴 208	土師器	皿	(10)	(2.1)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/6 褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-8	柱穴 208	瓦器	有蓋	(26)	(5)		内面は、朝毛目 外面には、煎頭圧痕が有り	内径 2.5Y2/1 黒色	密	13 世紀代
Ⅱ-28-9	土坑 52	土師器	皿	(8.6)	(1.4)		内面はヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/4 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-10	土坑 52	土師器	皿	(9)	(1.8)		内面はヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 5YR7/6 褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-11	土坑 52	土師器	皿	(10)	1.7	(6)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：7.5YR8/4 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-12	土坑 52	土師器	皿	(11)	(2)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：5YR8/1 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-28-13	土坑 52	土師器	皿	(11)	(1.9)		内面は、ヨコナデ 外面は口縁部ヨコナデ体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/3 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-14	土坑 179	土師器	皿	(7.6)	1.1	(5.8)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR7/3 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-15	土坑 179	土師器	皿	(8)	1.3	(4.8)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR8/4 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-16	土坑 179	土師器	皿	(8)	1.6	(4.6)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR7/4 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-17	土坑 179	土師器	皿	(8)	1.3	(5)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR8/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-18	土坑 179	土師器	皿	(8.4)	1.3	(3.8)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR8/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-19	土坑 179	土師器	皿	(11)	2.2	(7.6)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 2.5YR2/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-20	土坑 179	土師器	皿	(11)	2.1		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/4 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-21	土坑 179	土師器	皿	(10.8)	2.1	(8)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/3 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-22	土坑 179	土師器	皿	(11.2)	2.2	(7.6)	内面は、ヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR7/3 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-23	土坑 179	土師器	皿	11.4	1.8	7.4	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR8/3 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-24	土坑 179	土師器	皿	12	(2.1)	(8)	内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径：7.5YR7/4 に近い黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-25	土坑 179	土師器	皿	(12)	(2.2)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR8/3 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-26	土坑 179	土師器	皿	(12.6)	(1.8)		内面は、口縁部から底部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 10YR8/4 浅黄褐色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-27	土坑 179	土師器	皿	(11)	(2.5)		内面はヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 2.5YR2/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-28	土坑 179	土師器	皿	(11.2)	(2.2)		内面はヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 2.5YR2/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-28	土坑 179	土師器	皿	(12)	(2.6)		内面は、ヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR8/1 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-30	土坑 179	土師器	皿	(12.8)	(2.5)		内面は、ヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内径 7.5YR8/2 灰白色	粗	13 世紀後半～ 14 世紀前半
Ⅱ-29-31	土坑 179	白磁	皿	(16)	(2)		内面、外面ともに施釉 体部 内面には、聖文がみられる	内径 2.5G3/1 明緑灰	密	14 世紀代
Ⅱ-29-32	土坑 179	瓦器	有蓋 器部	(4.8)	(2.6)		内面、外面ともにヨコナデ	内 10YR3/1 黒褐色 外 10YR7/1 灰白色	密	13 世紀代
Ⅱ-29-33	土坑 179	瓦器	罎	21.2	(9.7)		内面 ナデ・朝毛目 外面 ユビオサエ・煎頭圧痕あり	内 2.5Y7/1 灰白色 外 2.5Y7/1 灰白色から 2.5Y3/1 黒褐色	密	
Ⅱ-29-34	土坑 179	瓦器	罎	27	(11.1)		内面 ナデ・朝毛目 外面 ユビオサエ・煎頭圧痕あり	内 7.5Y7/1 灰白色 外 10YR/1 灰白色	密	
Ⅱ-29-35	土坑 179	瓦器	罎	(38)	(8)		内面は、朝毛目 外面は、ユビオサエ	内 10YR4/1 黄褐色 外 10YR7/3 黄褐色	密	13 世紀代

表3 遺物観察表

※重量のカッコ内は土部の口徑・底径は釧元、器高は残存、瓦はいずれも残存

報告書 №	出土遺構	器種	器形	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	形成技法の特徴	色調	胎土	備考
関30-36	土坑315	土師器	皿	(12.4)	(2)		内面は、ヨコナデ。 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・10YR7/4に濃い黄褐色	粗	京大 13世紀後半～ 14世紀前半
関30-37	土坑315	土師器	皿	(11.8)	(2)		内面はヨコナデ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・7.5YR7/4に濃い褐色	粗	京大 13世紀後半～ 14世紀前半
関30-38	土坑315	土師器	皿	(12)	(2)		内面はヨコナデ 外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内・2.5Y3/2黄褐色 外・10YR6/3に濃い黄褐色	粗	京大 13世紀後半～ 14世紀前半
関30-39	土坑315	土師器	皿	(11.2)	(2.3)		内面はヨコナデ 外面は口縁部ヨコナデ体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・2.5YR2/2灰白色	粗	13世紀後半～ 14世紀前半
関30-40	土坑315	青磁	杯	(22.8)	5.3	10.8	内面、外面ともに施、高台接ぎ面のみ表面 内面底部に見魚文 外面体部には蓮弁文あり	内外・7.5Y5/2灰オリーブ色	密	13世紀中～ 14世紀初
関30-41	土坑316	瓦器	羽釜	(25)	(5.5)		内面 ナデ・刷毛目 外面 ユビオサエ・指染付痕あり	内・2.5Y6/1黄灰色 外・2.5Y3/1黄褐色	密	
関30-42	柱穴169	土師器	皿	7.2	1.7	3.4	内面は、ヨコナデ。 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・7.5YR7/6褐色	粗	京大 14世紀後半～ 15世紀前半
関30-43	柱穴169	土師器	皿	(12)	2	(7.8)	内面は、口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・5YR6/6褐色	粗	京大 14世紀後半～ 15世紀前半
関30-44	柱穴169	土師器	へそ皿	6.6	2	2.8	内面は、ヨコナデ。 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・7.5YR8/3浅黄褐色	粗	京大 14世紀後半～ 15世紀前半
関30-45	柱穴169	青磁	杯	(24)	(3.2)		内面、外面ともに施、口縁部は、花形斑	内外・7.5Y6/3オリーブ黄	密	13世紀中～ 14世紀初 京大
関31-46	土坑56	土師器	皿	(8)	1.8	4.6	内面は、口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・7.5YR7/6褐色	粗	15世紀後半～ 16世紀初
関31-47	土坑56	土師器	皿	(9.6)	1.9		内面は、口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・10YR8/3浅黄褐色	粗	京大 15世紀後半～ 16世紀初
関31-48	土坑56	土師器	皿	(13.4)	3.5		内面は、口縁部から体部にかけてヨコナデ。 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・7.5YR8/3浅黄褐色	粗	京大 14世紀後半～ 15世紀前半
関31-49	土坑56	灰輪 陶器	香炉	8.8	6.5	4.8	内面は、口縁部から体部上位にかけて彫飾 外面は、口縁部から体部下位まで彫飾、底部 外面に糸切り痕あり	内・2.5Y7/4浅黄褐色 外・5Y6/2灰オリーブ色	密	瀬戸窯系 15世紀
関31-50	土坑156	土師器	皿	(14)	(2.5)		内面は、ヨコナデ。 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内・2.5YR1/1灰白色から7.5YR8/4 浅黄褐色 外・7.5YR8/4浅黄褐色	粗	京大 15世紀後半～ 16世紀初
関31-51	柱穴250	土師器	皿	6.8	1.3	(3.4)	内面は、ナデ、ユビオサエ 外面は、ユビオサエ	内外・10YR7/3に濃い黄褐色	粗	16世紀前半 ～末
関31-52	柱穴250	陶器	すり鉢	(31)	6.8		内面、外面ともに口縁ロナデ 体部 内面に6葉1単位の磨目	内・2.5YR4/2灰赤色 外・2.5Y5/2相灰白色	密	15世紀後半～ 16世紀代
関31-53	土坑188	土師器	皿	(13)	2	(7.8)	内面は、口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ 外面は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外・10YR7/2に濃い黄褐色	粗	16世紀前半 ～末
関31-54	土坑188	陶器	椀	10	5.7	4.4	内面は、彫飾 外面は、口縁部から体部上位にかけて彫飾	輪・2.5Y6/2灰黄色 外・赤地：5YR4/4に濃い赤褐色	密	肥前系
関32-55	柱穴13	瓦	平瓦	長 (14.4)	幅 (12)	厚 (2.2)	凹面、凸面ともにナデ	凸凹・5Y5/1灰色	密	
関32-56	柱穴13	磚	長 (14.3)	幅 (12.4)	厚 (1.6)		上面、下面ともにナデ	上・下・2.5Y4/1灰褐色	密	
関32-57	柱穴111	瓦	丸瓦	長 (20.5)	幅 (9)	厚 (2.8)	凹面は、布目焼残る 凸面は、ナデ、陶年焼残る	凸凹・10YR4/1黄灰色	密	
関32-58	柱穴111	瓦	丸瓦	長 (13.8)	幅 (7)	厚 (2)	凹面は、布目焼残る、布が著った痕あり 凸面は、ナデ	凸凹・2.5Y5/1黄灰色	密	
関33-59	柱穴111	瓦	平瓦	長 (14.5)	幅 (14.5)	厚 (2.7)	凹面、凸面ともにナデ 凹面には布目焼残り凸面には溝状に線がある	凸凹・5Y7/2灰白色	密	
関33-60	柱穴191	瓦	平瓦	長 (12.8)	幅 (13.7)	厚 (1.8)	凹面、凸面ともに糸切り痕残る 凹面は布目焼残り、凸面はナデ	凸凹・10YR3/1黄褐色	密	
関33-61	柱穴258	磚	長 (12)	幅 (7.4)	厚 (3.4)		断面は穿孔されている(1.4×0.7mm) 上面はナデ、下面は網目焼残る	上・下・2.5Y3/1黄褐色	密	
関34-62	柱穴190	石製品	白目	(32)	11.5			2.5Y5/1黄灰色	密	花崗岩製
関34-63	柱穴83	銭貨	宋銭	2.4			「太平通寶」			976年開鑄

